

# 片江B遺跡

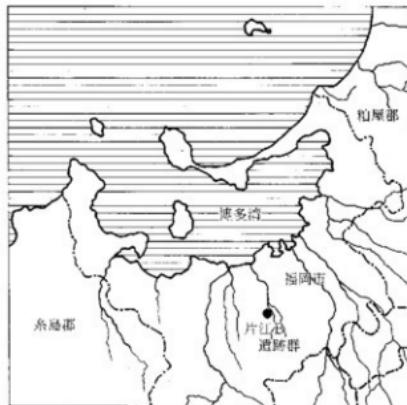
—片江B遺跡群第2次調査報告書—

2001

福岡市教育委員会

# 片江B遺跡

—片江B遺跡群第2次調査報告書—



遺跡名　片江B遺跡群第2次　遺跡略号　KEB-2　調査番号　8612

2001  
福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの文化財が分布しています。本市では、文化財の保護、活用に努めていますが、都市基盤整備事業や各種の開発によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、城南区片江一丁目地内に所在する片江B遺跡群内で、共同住宅建設に先立って発掘調査を実施しました片江B遺跡群第2次調査の報告書です。

本調査では、弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層と中世の集落などが検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。

発掘調査実施にあたり、費用負担などのご協力を賜りました多々野忠之氏をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

また、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

## 例　言

1. 本書は、城南区片江一丁目地内の開発に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が国庫補助事業（一部、受託）で、発掘調査を実施した片江B遺跡群第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治・城戸康利・上方高弘ほかが作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、井上加代子・山口朱美・山口謙治が作成した。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治が、遺物を平川敬治が撮影した。
5. 本書使用の図面の製図は、山口朱美が行った。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆・編集は山口謙治が行った。
8. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

## 本文目次

第1章 序説	
1. はじめに .....	1
2. 調査の体制 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境	
1. 本調査報告遺跡の位置 .....	2
2. 本報告周辺遺跡の概要 .....	2
第3章 調査の記録	
1. 調査の概要 .....	5
2. 遺構と出土遺物 .....	7
3. 包含層と出土遺物 .....	14
第4章まとめ .....	32

## 挿図目次

Fig. 1 片江B遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	3
Fig. 2 地形実測図 .....	4
Fig. 3 遺構配置実測図 .....	6
Fig. 4 第1号井戸(S E -01)実測図 .....	7
Fig. 5 第2号地下式横穴(S K -02)実測図 .....	8
Fig. 6 第4・9号土坑(S K -04・09)実測図 .....	9
Fig. 7 遺構および遺構検出時出土遺物実測図 .....	10
Fig. 8 第10・11号掘立柱建物(SB-10・11)実測図 .....	12
Fig. 9 第12~14号掘立柱建物(SB-12~14)実測図 .....	13
Fig. 10 調査区中央土層断面実測図 .....	15
Fig. 11 包含層出土須恵器実測図(1) .....	17
Fig. 12 包含層出土須恵器実測図(2) .....	18
Fig. 13 包含層出土弥生土器実測図(1) .....	20
Fig. 14 包含層出土弥生土器実測図(2) .....	21
Fig. 15 包含層出土弥生土器実測図(3) .....	22
Fig. 16 包含層出土弥生土器実測図(4) .....	23

Fig.17	包含層出土弥生土器実測図(5) .....	24
Fig.18	包含層出土弥生土器実測図(6) .....	25
Fig.19	包含層出土弥生土器実測図(7) .....	26
Fig.20	出土石器実測図(1) .....	27
Fig.21	出土石器(2)および土製品実測図 .....	28
Fig.22	出土石器実測図(3) .....	29
Fig.23	出土石器実測図(4) .....	30

## 図 版 目 次

PL. 1	(1) 調査予定地	(2) 調査区遺構分布状況
PL. 2	(1) 第2号地下式横穴完掘状況	(2) 第2号地下式横穴堅坑
PL. 3	各遺構出土遺物	
PL. 4	(1) 第1号井戸完掘状況	(2) 第4号土坑完掘状況
PL. 5	(1) 各遺構出土遺物および遺構検出時出土遺物 (2) 出土須恵器(1)	
PL. 6	(1) 第10号掘立柱建物完掘状況	(2) 第11号掘立柱建物検出状況
PL. 7	出土須恵器(2)	
PL. 8	出土弥生土器(1)	
PL. 9	出土弥生土器(2)	
PL. 10	出土弥生土器(3)	
PL. 11	出土弥生土器(4)	
PL. 12	出土弥生土器(5)	
PL. 13	出土石器(1)および土製品	
PL. 14	出土石器(2)	
PL. 15	(1) 出土石器(3) (3) 弥生土器出土状況	(2) 調査区土層堆積状況

# 第1章 序説

## 1. はじめに

城南区片江一丁目地内に、地権者である多々野忠之氏により共同住宅建設が計画され、昭和60年12月20日に福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に、埋蔵文化財事前審査願書が提出された。この申請地は、周知の遺跡である片江B遺跡群に含まれており、同遺跡群のほぼ中央部にあたること、開発計画が共同住宅建設であり、遺跡が遭存している場合は遺跡が破壊される恐れがあることなどから、埋文課は遺構の遺存状態の確認と遺跡の内容把握のため試掘調査が必要であると決定した。

試掘調査は、対象地1,744m<sup>2</sup>について丘陵斜面および谷の軸に直交するかたちで試掘調査溝を3本設定し、昭和61年2月4日に実施した。敷地の西南に設定した第1試掘調査溝では、地表下10~30cmで西から2/3が地山である花崗岩塊乱土となり、残りには弥生上器を包含する灰褐色粘質土が広がっていた。その北側に平行して設定した第2試掘調査溝では、西端は地表下30cmで、そこから東側は急な段落ちとなり、東端部では表土下1.6mで弥生時代中期の弥生上器を包含する黒褐色粘土となり、その下は明褐色粘土となり小穴が検出された。第1試掘調査溝の東側延長部に設定した第3試掘調査溝では、30~40cmの表土および黄褐色の下に、黒褐色粘土、須恵器を包含する黄褐色粘土、黒褐色粘土が堆積し、地山の黄褐色粘土となり、上位の黒褐色粘土の上面と地山面で遺構が確認された。

以上の試掘調査結果を受け、埋文課は申請地に弥生時代から古墳時代にかけての集落が遺存しており、現状保存が必要であると決定し、申請者と埋文課は共同住宅建設の計画変更について協議を行つたが、現状保存は困難であり、建物建設地を対象とした発掘調査を実施することになった。発掘調査にあたって、今回の開発は個人の多々野忠之氏による事業であるが、用途が共同住宅建設であるため申請者と調査費、調査期間、出土遺物の取り扱いなど協議を重ね、調査費の一部を多々野氏に負担していただくことで契約条項が整い、調査契約が成立し、調査事務所など附帯条件が整ったあと、本調査に着手した。

調査名	片江B遺跡群第2次調査	遺跡調査番号	8612		
調査地地籍	城南区片江一丁目1069-1・1070	分布地図番号	63-0207	遺跡略号	KEB-2
調査期間	1986年6月4日~同年7月5日	開発面積	1,744 m <sup>2</sup>	調査実施面積	764 m <sup>2</sup>

## 2. 調査の体制

調査の体制としては、以下に示す体制を構成した。緊急調査であるため充分なる体制は組むことができなかつたが、発掘調査の委託者である多々野忠之氏をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査は順調に進行いたしました。関係各位に謝意を表します。

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善朗（前） 生田征生

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（前） 山崎純男

第2係長 飛高憲雄（前） 調査第1係長 山口謙治

試掘調査担当 山崎純男・杉山富雄・池崎謙二

調査担当 山口謙治

事務担当 松延好文（前） 御手洗 清（文化財整備課管理係）

調査協力者 城戸康利・上方高弘・李弘鍾・野村俊之・犬丸陽子・松本幸子・池ノ上宏・牟田祐二・中村清治・田中利佳子・田中愛子(福岡大学歴史研究部)  
整理協力者 犬丸陽子・井上加代子・平川敬治・山口朱美・原本幸子

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1. 本調査報告遺跡の位置 (Fig.1・2)

福岡平野は、中央部に背振山系から北に派生する丘陵によって、狭義の福岡平野と早良平野に分けられる。この丘陵を開析するかたちで南区の萩ノ原峠を源とする樋井川が北流し、博多湾に注いでいる。樋井川下流域の博多湾沿岸には古砂丘が発達し、中流域東岸は南から北に低くなりながら延びる丘陵となり標高40~10mを測る。中流域西岸は油山から北に低くなりながら延びる標高40~20mを測る丘陵となっている。また、同河川は中流域中央部で本松川と合流しているが、この合流地周辺に標高10m強の沖積地が発達している。現在この地域は、都市基盤整備が進み縦横に都市計画道路が走り、市街地化している。とくに樋井川東岸は早く都市基盤整備が進んだため、丘陵には多くの遺跡が所在したと考えられるが、点的に遺跡が確認されているのみである。かたや樋井川西岸の丘陵上には、都市基盤整備は進んでいるものの個人の住宅地となっているため多くの大遺跡が所在している。片江B遺跡群は、樋井川支流本松川と本松川支流片江川間に油山から北東方向に派生した先端の標高12~28m強を測る丘陵上に所在している。

本調査地は、片江B遺跡群のほぼ中央部にあたり、本調査実施までは宅地として使用されていた。本調査地は、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から26.2cm、西から24cmにあたる。

### 2. 本報告周辺遺跡の概要 (Fig.1・2)

片江B遺跡群内においては、本報告の他に第1次と第3次の本調査が実施されている。第1次調査地(片江辻遺跡)は本調査地の北150mにあたり、片江区画整理事業に伴う事前調査として、昭和50年9月16日から同年12月4日にかけて930m<sup>2</sup>について行われている。調査の結果、6世紀後半の比較的短期間の堅穴住居跡群からなる集落が営まれていたことがわかった(塙屋勝利・力武卓治編1977『片江辻遺跡』)。

第3次調査地は本調査地の南南西150mにあたり、片江東公園建設に伴う確認調査の延長として16.6m<sup>2</sup>について平成4年12月4日から5日間で行われている。第3次調査地は、丘陵裾部にあたり、8~9世紀にかけての水田跡が検出され、弥生土器、古墳時代から平安時代の土器・須恵器などが出土している(吉武学1994『片江B遺跡群第2次調査(KEB-2)』『福岡市文化財年報Vol.7』所収)。

樋井川流域には、各時代各時期の遺跡が所在しているが、前で述べたように比較的早く市街地化したため調査事例は少ない。先土器時代から縄文時代の遺跡としては、片縄山麓で柏原遺跡の調査が実施されており、縄文時代の草創期から早期にかけての各時期の土器・石器が炉や土坑などの遺構を伴い良好なかたちで出土している。なお、先土器時代の遺物は、柏原遺跡・神松寺遺跡などで点的に出土しているのみである。

弥生時代に入ると、樋井川流域においても大遺跡が所在するようになる。河口に形成されている古砂丘上には西新町遺跡があり、中期の壺棺墓などからなる墓地、終末期から古墳時代にかけての堅穴



- |            |            |            |                |             |
|------------|------------|------------|----------------|-------------|
| 1. 片江B遺跡群  | 2. 元寇跡     | 3. 痴勒遺跡    | 4. 西新町遺跡       | 5. 原遺跡群     |
| 6. 雄東遺跡群   | 7. 飛心遺跡群   | 8. 榆林古墳    | 9. 西治山古墳群      | 10. 鶴ヶ池古墳群  |
| 11. 驚々原古墳群 | 12. 大谷古墳   | 13. 金瀬戸古墳  | 14. 早苗田古墳群     | 15. 鳥越古墳群   |
| 16. 鷺戸口古墳群 | 17. 東瀬山古墳群 | 18. 焼口古墳   | 19. 京ノ瀬古墳      | 20. 四鳥遺跡    |
| 21. 神松守遺跡  | 22. 律泉寺遺跡  | 23. 長尾遺跡群  | 24. 宮台遺跡群      | 25. 騎井川遺跡群  |
| 26. 松原遺跡群  | 27. 桜塚古墳群  | 28. 太平寺古墳群 | 29. 柏原古墳群      | 30. 四ツ塚古墳群  |
| 31. 大牟田古墳群 | 32. 褐岡城跡   | 33. 善白塚古墳  | 34. 茶臼山古墳      | 35. 古墳穴観音石窟 |
| 36. 和田古墳群  | 37. 老河古墳   | 38. 鈴多遺跡群  | 39. カルメル修道院内壇跡 |             |

Fig.1 片江B遺跡の位置と周辺の遺跡

住居跡群からなる集落が検出されている。河川中流域西岸の丘陵上には、前期の貯蔵穴群が検出された淨泉寺遺跡、前期から中期にかけての豐棺墓などからなる墓地が検出されているカルメル修道院内遺跡、後期の堅穴住居跡群からなる神松寺遺跡などがある。また、樋井川と本松川に挟まれた丘陵上には、中期の堅穴住居跡群などからなる集落が検出されている宝台遺跡群や前期の貯蔵穴や中期の環濠が検出されている樋井川遺跡群などがある。

古墳時代に入ると、下流域東岸の丘陵上に首長墓と考えられる前方後円墳（茶臼山古墳・茶臼塚古墳）が築かれている。このほか、前方後円墳は中流域西岸に神松寺古墳、片岡山麓に柏原古墳があり、前方後方墳の京ノ隈古墳が中流域西岸に築かれている。また、背振山系の麓には、柏原古墳群・太平寺古墳群・松原古墳群・東油山古墳群・瀬戸口古墳群・鳥越古墳群・早苗田古墳群・倉瀬戸古墳群・駄ヶ原古墳群・霧ヶ滝古墳群・七隈古墳群などの後期前後の群集墳が営まれている。

古代に入ると、下流域東岸の丘陵上に鴻臚館が設置されており、河川流域に所在する丘陵上には集落が営まれており、中世まで継続している。また、13世紀の後半には元寇防壁が海岸線に沿って築かれている。

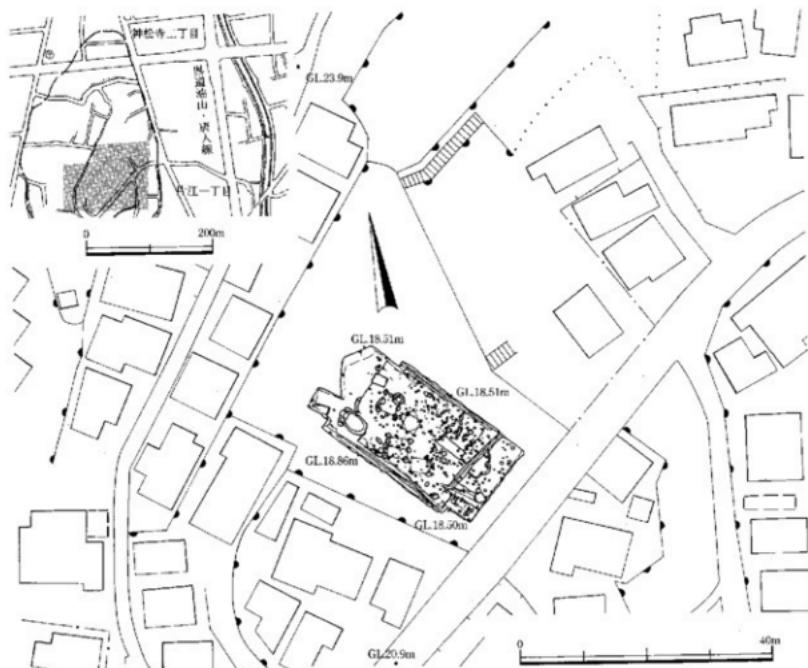


Fig.2 地形実測図

## 第3章 調査の記録

### 1. 調査の概要 (Fig.2・3, PL.1)

共同住宅建設予定地（以下、申請地とする）は、南東部が幅6mの道路に接し、他の3面は民有地と接しており、南東部を上辺とする台形を呈している。地形的にみていくと、北西部と南東部が高く、申請地は東北方向に緩やかに傾斜する鞍部となっている。本調査は、委託者と埋文課との協議の過程で、北北西・南南東方向で計画されている建物建設予定地を調査対象とするとなっており、申請地の北側に調査事務所を設置し、施上も申請地敷地内で処理することとなっていた。

本調査は、調査対象である建物建設予定地を可能な限り実施することとし、南側は道路から2m前後の引きをとり、西側は民有地から4~8mの引きをとり、北側は8m、東側は最少6mの引きを取り東西16m強、南北30m強の調査区を設定した。

本調査は、まずバックホーを使用して10~120cm強の表土および黄褐色土を除去することから始めた。その結果、調査区の北側は地山である花崗岩塊乱土となり、調査区中央は東へ緩やかに傾斜する谷状をなし、南端は花崗岩塊となる面で遺構が検出されたので精査した。この面は、標高17.9~19mを測り古代から中世の遺構群を検出した。さらに、古墳時代の須恵器を包含する40cm前後の鉄分を含む灰褐色砂質土を除去した面で柱穴や小穴が検出されたため精査したが、柱穴のほかの明確な遺構は検出できなかった。その下に弥生土器を包含する鉄分を多く含む灰褐色砂質土、暗灰褐色~黒褐色土・黒褐色土が堆積し、標高17.5~16.5mの谷底となり、地山となる。黒褐色土の上面および地表面では、杭などの構築物があったと考えられ小穴が多数検出できた。

遺構は、北側・南側および西側の調査区のなかでは比較的高いところで検出した。検出遺構としては、掘立柱建物4棟、井戸1基、土坑4基、地下式横穴1基、溝状遺構、柱穴、杭穴多数がある。これらの検出遺構は、掘立柱建物をSB、井戸をSE、土坑・地下式横穴をSK、溝状遺構をSD、柱穴・杭穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した【例：SE-01（井戸）・SK-02（地下式横穴）・SK-03（土坑）…SD-07（溝状遺構）…SB-10（掘立柱建物）】。なお、柱穴については検出順に遺構記号SPの後に2桁の通し番号を付し、建物として確認したものは整理作業過程で、遺構番号の後に2桁の通し番号を付した（例：SP-1001）。本書のなかでは遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物として、縄文時代の石器、弥生時代の弥生土器・土製品・石器、古墳時代の須恵器・石製品、古代の須恵器・土師器、中世の土師器・輸入陶磁器・石鍋などがある。これらの出土遺物は、國化したもの、写真撮影したものについては、頭に8612の調査登録番号を冠し、弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器（土器類）・土製品は00001から、石器および石製品は01001からそれぞれ通し番号を付し登録番号とした【例：861200001~861200400（土器類・土製品）、861201001~861201080（石器・石製品）】。なお、本書のなかでは、押図および図版は調査登録番号を外した5桁の番号で示し、本文中では土器類・土製品は2・4桁で、石製品は2桁で述べていくことにする。また、未國化・未撮影の土器類は、古代から中世の遺構出土遺物は各遺構ごとに、古代から中世の遺構検出時の出土遺物は遺構検出時出土遺物とし、出土遺構不明の出土遺物は表探遺物として、包含層出土のものは出土層位ごとに各器種に分けコンテナごとに、石製品は括してコンテナごとに国化・撮影遺物の後の通し番号を付し登録番号とした。

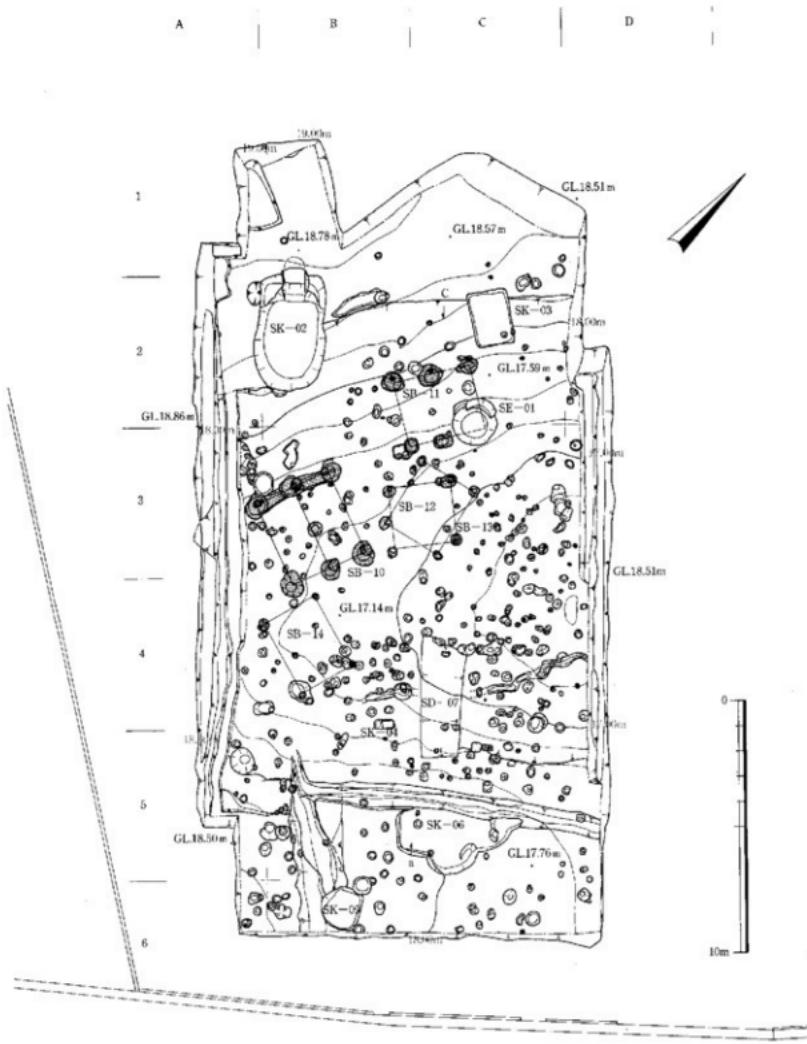


Fig.3 遺構配置実測図

## 2. 遺構と出土遺物

### (1) 第1号井戸 (SE-01) と出土遺物 (Fig.4-7, PL.3-4)

本井戸は、調査区の北側のやや東寄りに位置し、灰褐色砂質土および鉄分を含む灰褐色砂質土の上面で検出し、第11号掘立柱建物（以下、SB-11とする）を切っている。検出面では径1.5~1.9mを測る平面形円形を呈し、暗灰褐色～黒褐色土・黒褐色粘質土・黄灰褐色土を掘り抜き、地山である花崗岩媒壊土に掘り込んでいる。底面は1m刻を測る円形を呈し、2.3m遺存している。覆土は、上から茶褐色土・黄褐色土、茶褐色～黄褐色砂質土、青灰色粘土、黄褐色砂質土、茶褐色砂質土、青灰色粘土、茶褐色砂混じる粘土の順層堆積となっており、南側から流れ込んだ状況を呈している。地山の浸みだし水や谷の湧水を利用した井戸といえる。

本井戸からは、弥生時代の太型蛤刃石斧、古墳時代後期の須恵器片身(07)、中世の陶器甕(08)と滑石製石鍋片(48)が出土した。07は蓋受けの造りだしを持つ片身で、口径10.4cm、受け部径12.6cm、器高3.5cmを測る。08は口徑33.7cmを測る陶器の口縁部で、器面には褐釉がかかり、張った胴からすぼまり直に立ち上がる短い頸から外反する玉縁状をなす口縁となっている。48は滑石製の石鍋胴部片で、器面は削り加工で成形後、研磨を加え仕上げている。

以上から、本井戸は谷および地山の湧水を用いた井戸で、出土遺物から中世のものといえる。

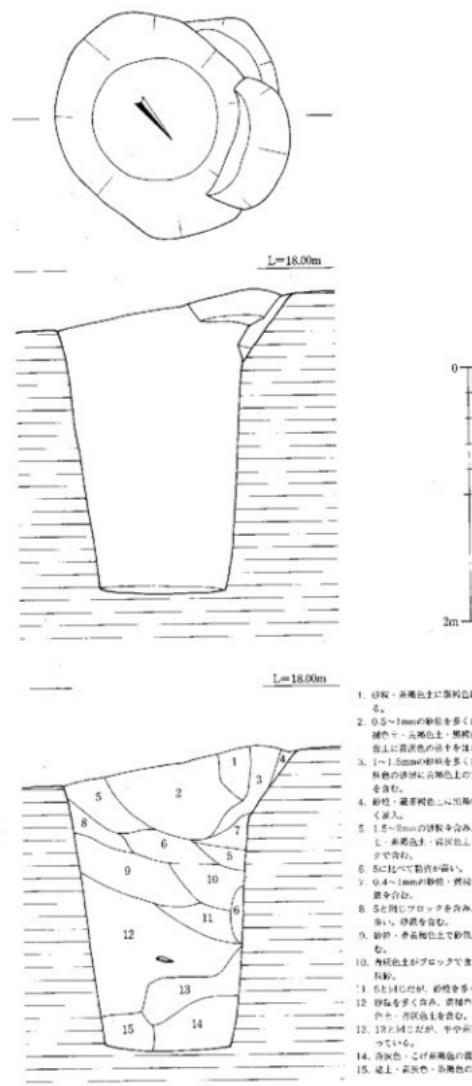


Fig.4 第1号井戸 (SE-01) 実測図

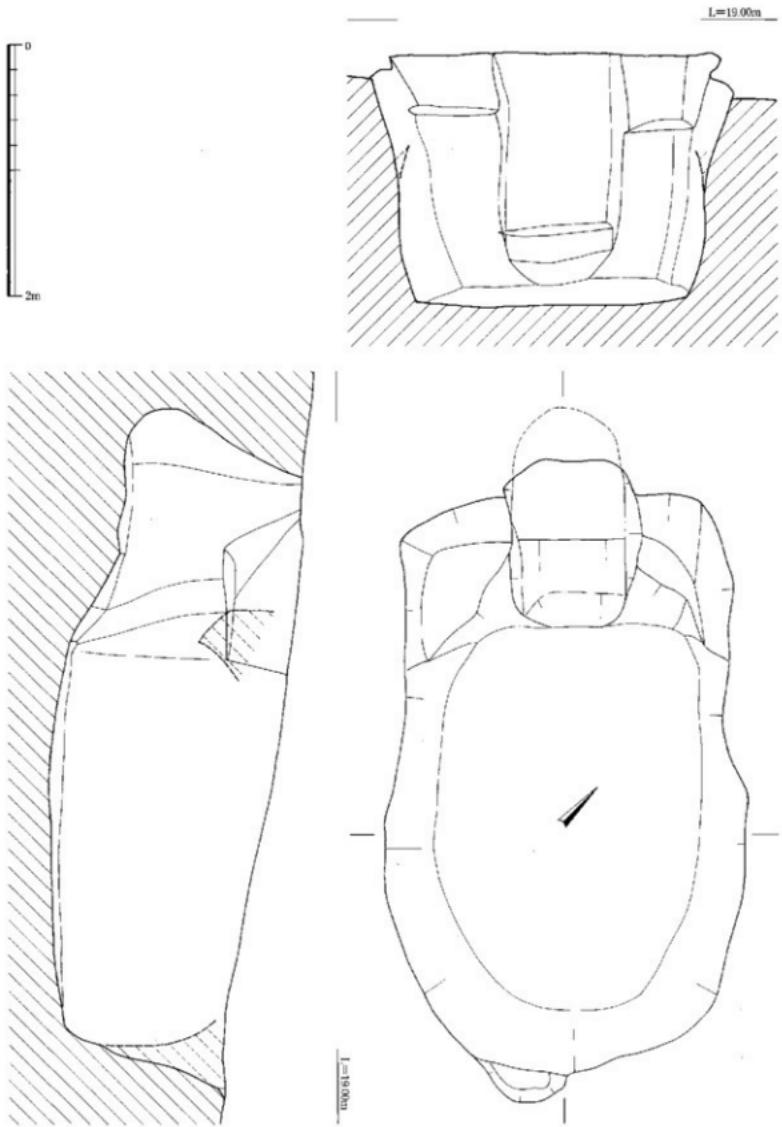


Fig.5 第2号地下式横穴 (SK-02) 実測図

(2) 第2号地下式横穴 (SK-02)

と出土遺物 (Fig.5-7, PL. 2-3)

本地下式横穴は、調査区の北西隅の地山である花崗岩壊乱土の面で、平面形隅丸方形の土坑に「コ」の字状をなす飛び出しがあるかたちで検出した。埋土および崩落土を除去していくと、飛び出し部は検出面から1.5mで、上坑部は同じく1.8m前後でほぼ平坦な底となり地下式横穴(地下坑)であることを確認した。崩落しているか、精査の結果、豊坑は検出面では1×1.2mを測る平面形隅丸方形を呈し、床面はやや凹凸があり南側に玄室に向かう門(羨門)が設けられていたと考えられる。また、北側の壁は湾曲しており、もう1室設けようとした可能性がある。羨門は傾斜を持ち、長軸3m強、短軸2m強の平面形不正形を呈する玄室の床面となっている。床面はほぼ平坦で、やや開きながら立ち上がっているが、崩落しているため天井の形状はわからない。アーチ状をなしていたか。本地下式横穴の羨門と玄室の境目付近の床面で、供獻と考えられる土師器皿・杯10点数点が重なった状態で出土した。本地下式横穴の主軸方位はN-43.5°-Wである。

本地下式横穴からは、供獻と考えられる土師器皿・杯(09~19)のほか、豊坑の埋土や崩落土から弥生時代の弥生土器・剥片などの石製品、古墳時代の紡錘車、中世の白磁・青磁碗などの瓦類、石鍋(42)砥石(58)が出上した。10・11は糸切り底の土師器皿で、11は口径8.2cm、底径6cm、器高1.4cmを測る。09・

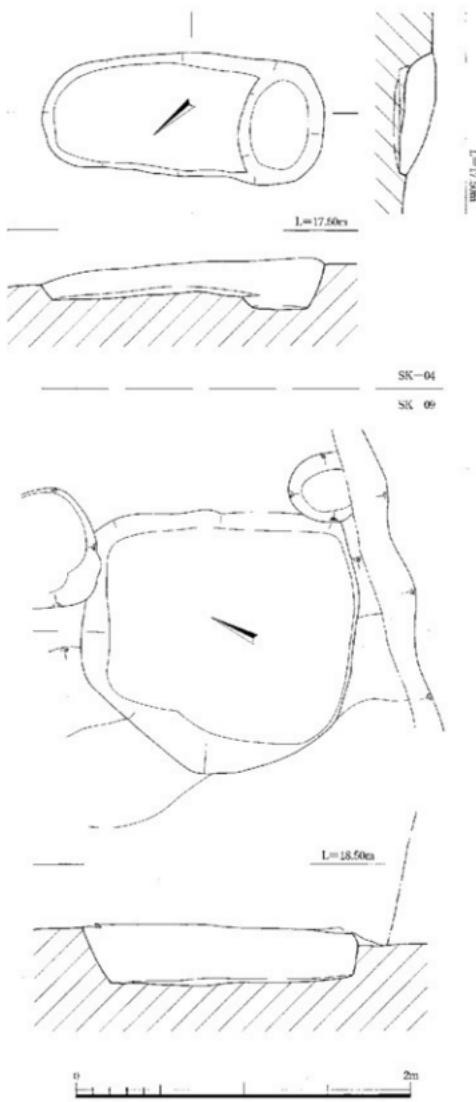


Fig.6 第4・9号土坑 (SK-04・09) 矢測図

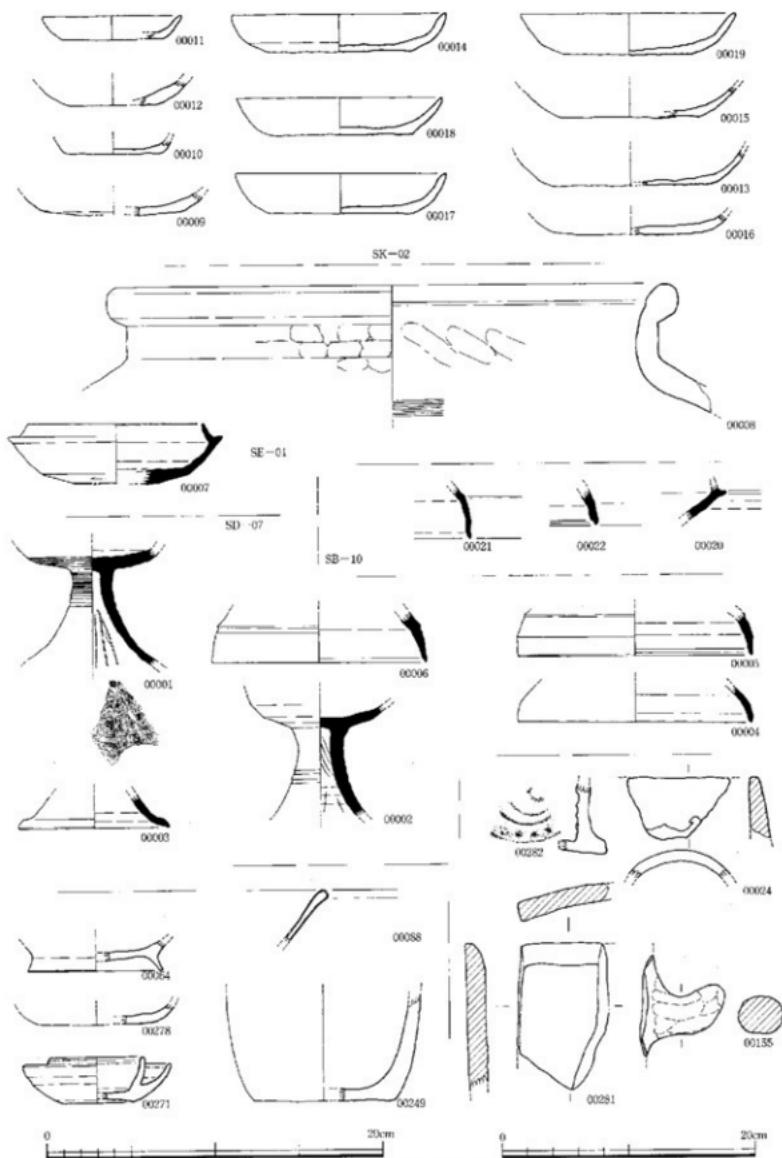


Fig. 7 遺構及び遺構検出時出土遺物実測図

12～19は糸切り底の上部器皿で、12の底径5.4cmを測るもののがもっとも小さく、底径でみると13の9.2cmがもっとも大きい。ほかは口径12.2～12.8cm、底径7.7～8.7cm、器高2.2～2.5cmを測る。42は滑石製石鍋の底の破片で、器面は削り加工後、研磨を加え仕上げている。外面は煤が付着し黒色を呈している。58は粘板岩製の手持ち砥石で、裏面が仕上げ用の砥面として使用されており、器長5cm、幅3.5cm、最大厚0.8cmを測る。

本地下式横穴は、平面形隅丸方形を呈する竪坑から南側に1玄室が構築されたもので、供獻と考えられる上部器皿・杯があることなどから墓といえよう。また、出土遺物から14世紀前半後に構築されたと考えられる。

### (3) 土坑と出土遺物 (Fig.3・6・7, PL.3・4)

本調査では、第3・4・6・9号 (SK-03・04・06・09) の4基の土坑を検出した。

**第3号土坑 (SK-03)** 本土坑は、調査区の北側のやや東寄りで、北側は地山である花崗岩礫乱土、南側は鉄分を含む灰褐色砂質土の上面の面で長軸2m強、短軸1.5mを測る平面形長方形のかたちで検出した。上から明茶灰色土・明茶灰褐色土・灰褐色土・明灰褐色土・明灰色土・茶灰色土・灰色土・灰白色土・黄茶褐色土・黄灰色土を埋土としている。南側半分が深く60cm、北側は40cm強遺存している。床はほぼ平坦で、壁は床から直に立ち上がっている。本土坑からは、弥生時代の鐵石・ビエスエスキュー、古墳時代の須恵器壺・甕と古代から中世の丸瓦・楕斗瓦が出土した。以上から、本土坑は古代末前後のものといえよう。

**第4号土坑 (SK-04)** 本土坑は、調査区中央部の西寄りの地山近くの面で検出した。検出面では長軸3.4m弱、短軸1.5m弱を測る平面形楕円形を呈し、南端に60cm強遺存の段掘りがあり、他の床はほぼ平坦で45cm弱遺存している。本土坑からの出土遺物はない。

**第6号土坑 (SK-06)** 本土坑は、調査区南側中央部の地山面で、長軸5m弱、短軸3m弱を測る平面形不正形の土坑として検出し、北側を東西方向に走る現代の側溝によって切られている。砂粒を多く含む灰褐色土・橙褐色土を含む灰褐色土を埋土とし、床面はほぼ平坦で25cm遺存し、壁はやや開きぎみに立ち上がりっている。本土坑からは、弥生時代の剥片と中世以降のものと考えられる挽き臼(59)が出土した。59は細粒砂岩製の挽き臼の下臼で、外面から下面は研磨で仕上げられており、火を受けたと考えられ外面は焼けて煤が付着している。底径18cm、遺存高12cmを測る。以上から、本土坑は、中世または近世のものといえよう。

**第9号土坑 (SK-09)** 本土坑は、調査区南端の地山である花崗岩礫乱土の面で、現代の溝や古代前後の柱穴に切られたかたちで検出した。検出面では3.1×3.25mの隅丸方形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁はやや開きぎみに立ち上がり、35cm強遺存している。本土坑からの出土遺物はないが古代前後のものか。

### (4) 堀立柱建物と出土遺物 (Fig.8・9, PL.5・6)

本調査では、5棟 (第10～14号) の堀立柱建物 (SB-10～14) を調査区の北側から西側中央にかけて検出した (以下、建物とする)。

**第10号建物 (SB-10)** 本建物は、調査区西側の北寄りで検出し、SP-1001～1007の7本の柱穴で構成される建物である。西側の桁行は幅55cm前後で、16～30cm遺存の布掘りがあり、布掘りの両端および中に径80cm前後を測る平面形不正形 (隅丸方形か) で、35～40cm遺存の掘り方が配置されている。東側桁行は布掘りがない。柱痕跡から径30cm前後の円柱を用いていたと考えられる。建物中央に径55cm前後で35cm遺存の柱穴があり、2×2間の倉庫と考えられる。桁行の柱間中心間は1.75m前後、梁行1.8m前後を測る。本建物の各柱穴掘り方や布掘りからは、弥生時代の弥

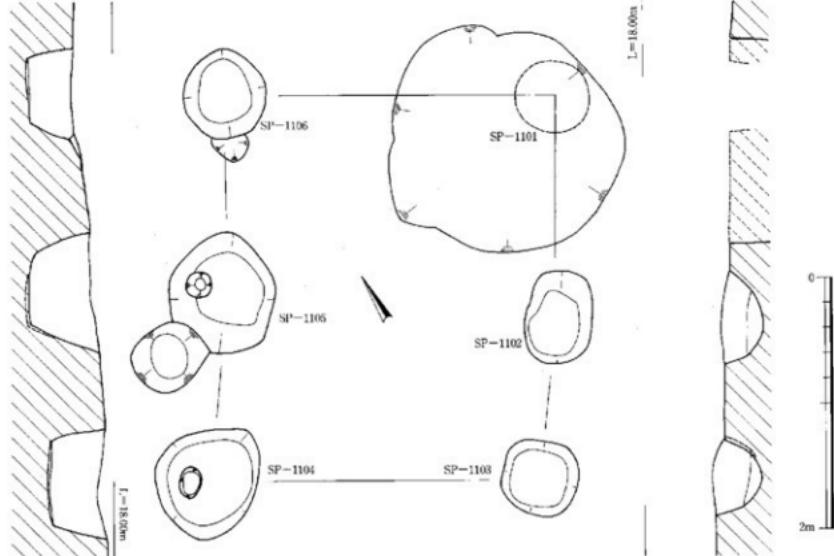
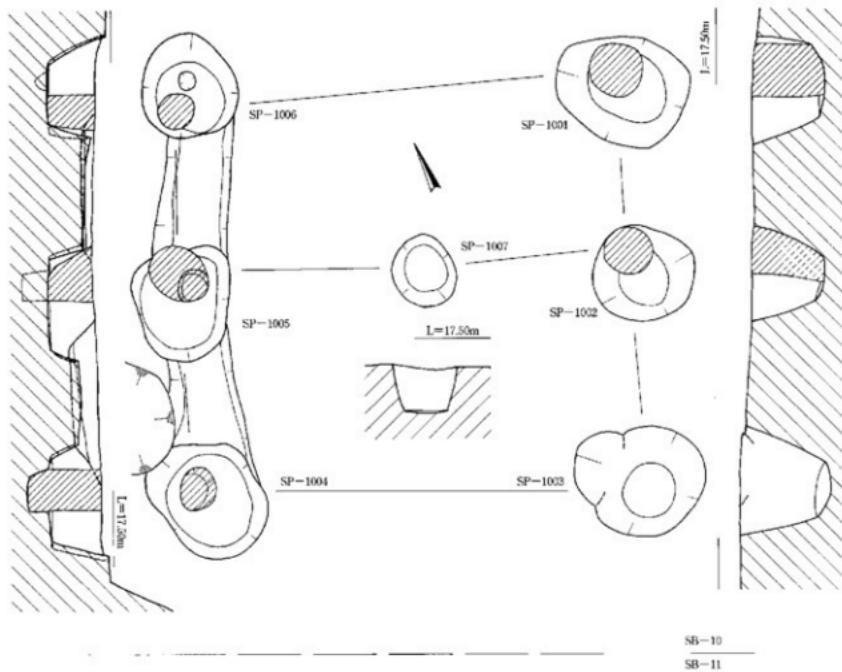


Fig.8 第10・11号掘立柱建物 (SB-10・11) 実測図

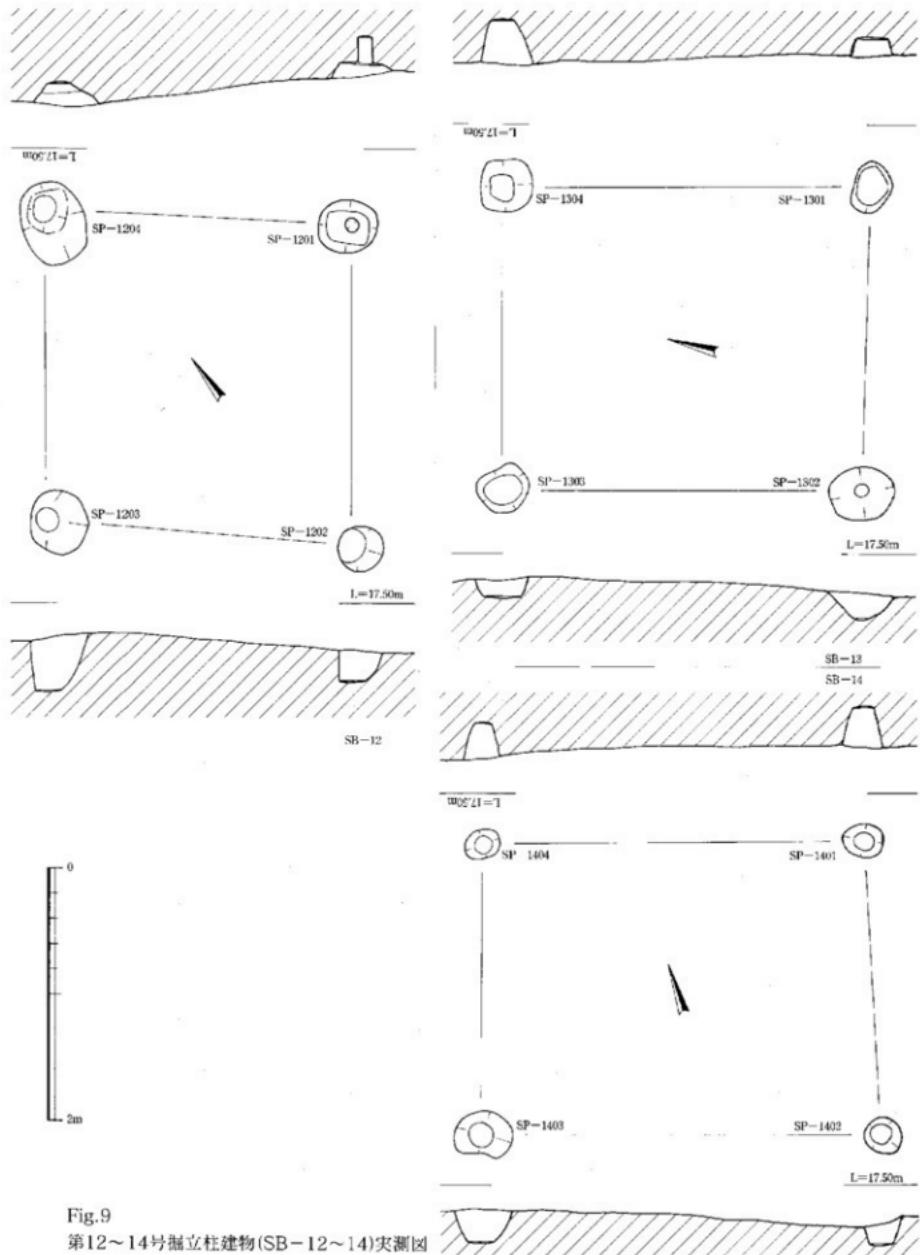


Fig.9

第12~14号掘立柱建物(SB-12~14)実測図

生土器、古墳時代の須恵器の坏蓋（21・22）・坏身（20）や8世紀の土師器の壺、須恵器の坏蓋・坏身の細片が出土した。

以上から、本建物は片側桁行に布振りを持つ桁行3.5m、梁行3.5mでN-17.5°-Eの主軸方位をとる倉庫で、出土遺物から8世紀前後のものといえよう。

**第11号建物（SB-11）** 本建物は調査区北側のほぼ中央に位置し、SE-01に切られている。SP-1101～1106の6本の柱穴から構成されている建物で、桁行の柱穴掘り方は径50～80cmを割り、30～50cm強遍在しており、柱穴中心間は1.5mを測り、梁行柱穴間は2.6mを測る。本建物の柱穴からは、弥生時代の弥生土器や古墳時代の須恵器細片が出土した。

以上から、本建物は桁行2間、梁行1間でN-33.5°-Eの主軸方位をとる1×2間の建物で、SB-10と建物配置がほぼ同じであり、建物間が2m前後であることなどから8世紀前後のものといえよう。

以上のほか、SB-12～14の3棟は前記2棟の建物より下位の面で検出し、柱穴から7世紀前後の須恵器破片があり、4本の柱穴からなる1×1間の建物としたが、建物の可能性があるとしておく。

#### （5）その他の遺構と出土遺物（Fig.3・7, PL.5）

本調査では、調査区の西寄りの鉄分を含む灰褐色砂質土の底面で、谷底に沿った幅30cm弱の第7号溝（SD-07）を検出したほか、最上面で多くの柱穴を、各面で杭穴と考えられる小穴を検出した。ここでは、第7号溝の出土遺物と古代から中世の遺構検出時に出土した遺物について紹介する。

**第7号溝出土遺物** 本溝からは、弥生時代の弥生土器のほか古墳時代の比較的まとまった須恵器が出土した。04～06は坏蓋で、06の口径は12.8cm、04・05は13.8cmを測る。01～03は高坏で、01は袖部下に2条の沈線を巡らし沈線から坏底にかけてカギ目が施されており、脚内面にヘラ記号がみられる。03は底径9cmを測る。以上の出土遺物から、本溝は7世紀頃のものといえよう。

**その他の古代・中世遺物** 本調査では最上面の柱穴や遺構検出時に、古代から中世の須恵器の坏蓋・坏身・壺、土師器の楕（64）・皿（0278）・壺（0249）・甕（0155）、内黒土器片、白磁の碗（88）など、青磁の碗など、陶器の灯明皿（0271）・蓋（0197）など、軒丸瓦（0282）・丸瓦（24）・平瓦（0281）などの瓦類、挽き臼の握り手（55）・砥石（50・51・60）・墓石（62）・碁玉などの石製品が出土した。55は砂岩製、50は凝灰岩製、51は頁岩製、60は砂岩製、62は花崗岩製である。

### 3. 包含層と出土遺物

#### （1）包含層について（Fig.10, PI.15）

現代の整地層である黄褐色土の下に、古代から中世にかけての遺構群を検出した2～6層の土層群があり、この層群は包含遺物から8世紀頃から中世にかけての整地層と考えられる。

2～6層群の下は、純層の堆積状態を示しており、7層下面から掘り込まれた柱穴などがあり、7層は出土遺物から7世紀頃形成されたと考えられる。8～13層群は、古墳時代後期の須恵器が包含されており、出土須恵器の時期幅は1世紀間強あるが分層できなかった。

14～17層群は、出土遺物から弥生時代に形成されたと考えられる。14層の遺物出土量がもっとも多く、下面から掘り込まれた柱穴なども検出され、出土遺物から弥生時代中期後半頃形成されたものといえよう。15層から下の層群の時期の確定はできなかったが、同時代の中期初頭頃から形成されたものと考えられる。

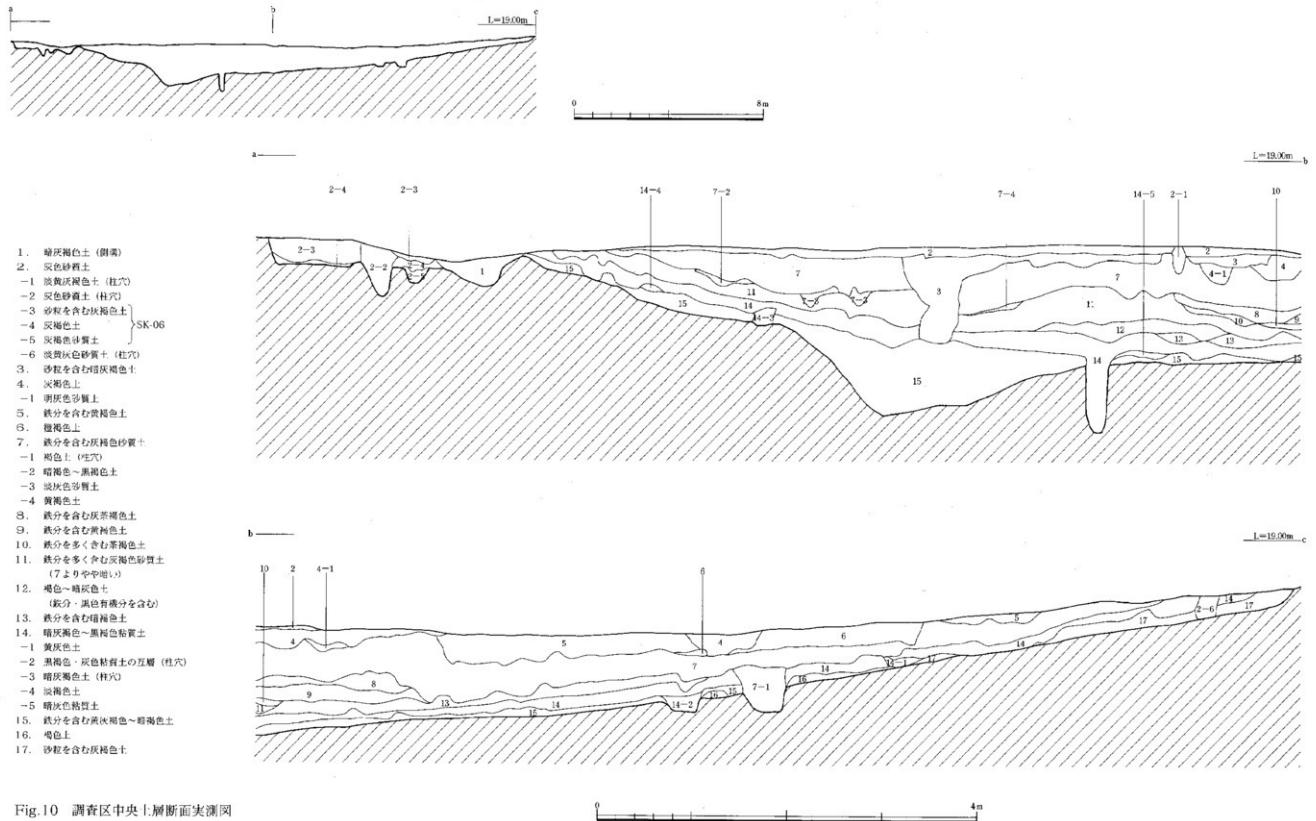


Fig.10 調査区中央上層断面実測図

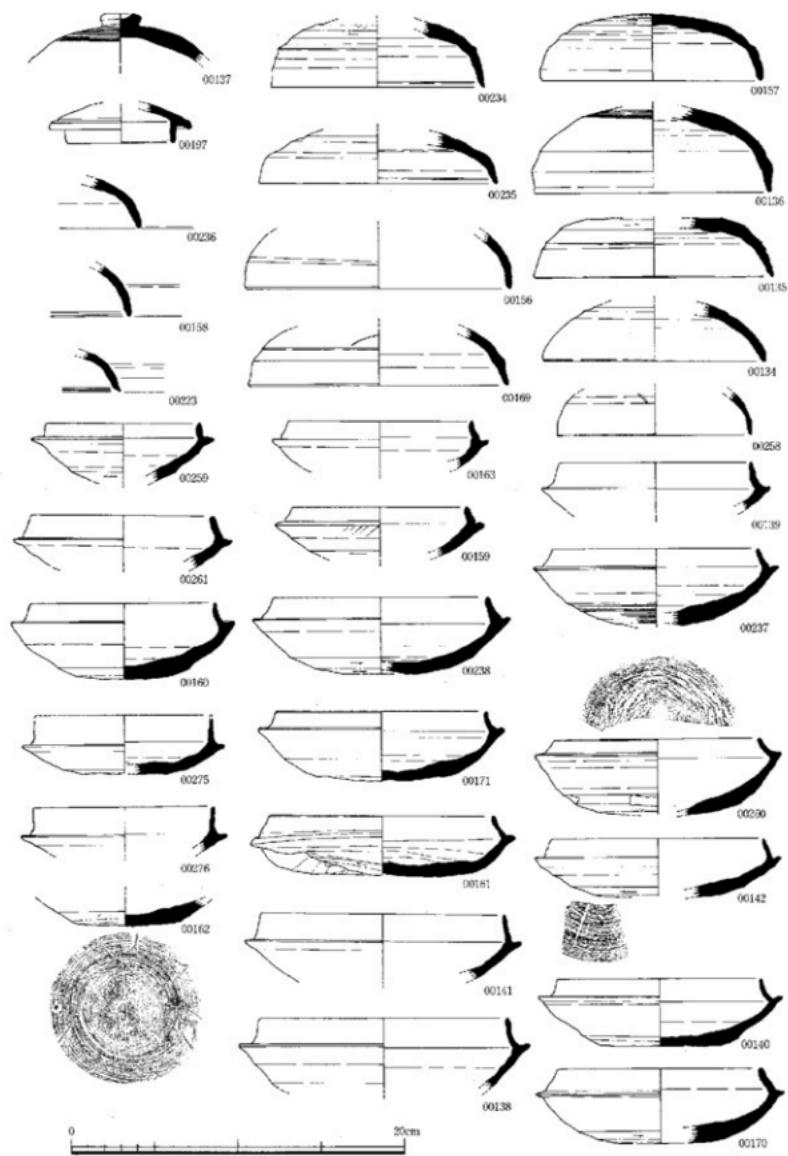


Fig. 11 包含層出土須惠器実測図 (1)

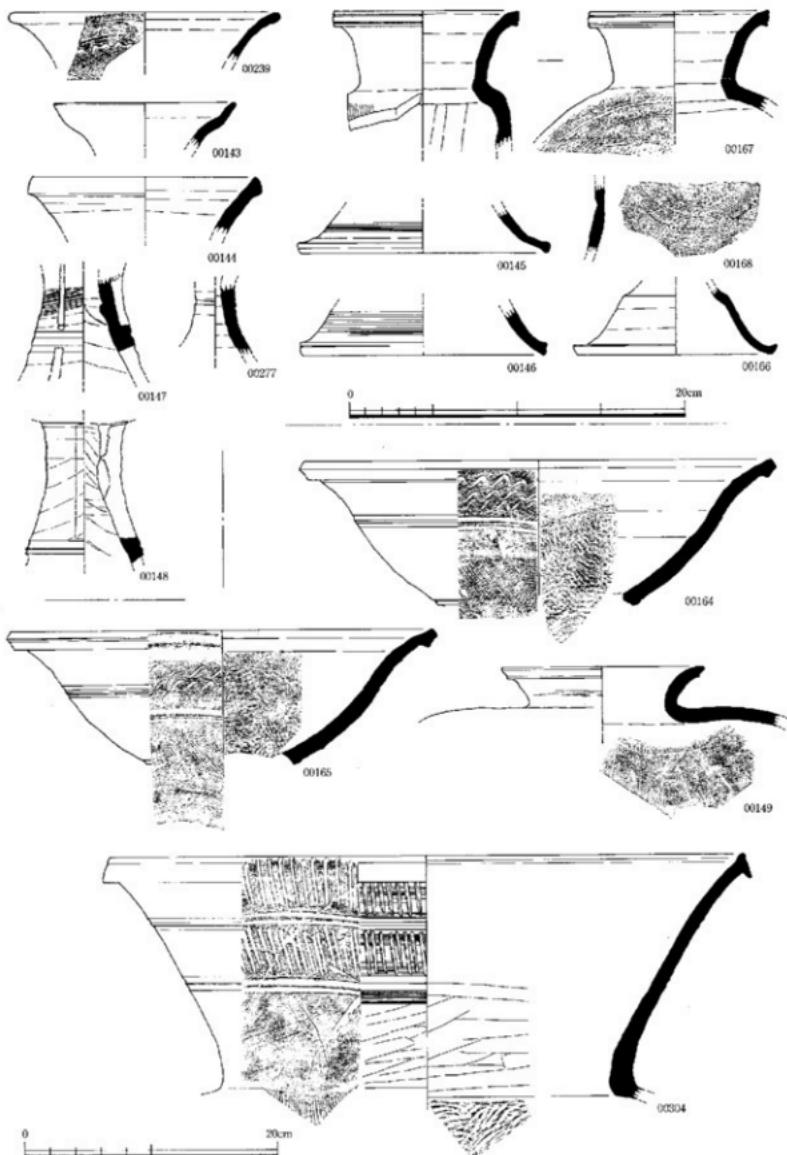


Fig.12 包含層出土須恵器実測図（2）

## (2) 古墳時代の出土遺物 (Fig.11・12, Pl.5・7)

本調査では、井戸・土坑など各造構および造構検出時、古代から中世の整地層、7層群および8～13層の包含層から古墳時代の土師器・須恵器や筋鉢車・砥石などの石器や石製品がコンテナ3箱ほど出土した。ここでは、土師器は細片のため図化できる遺物がなかったため、図化した47点の須恵器について紹介することにする。なお、石器および石製品については、出土石器・石製品・土製品の項でみていくことにする。

図化した須恵器は、蓋13点、坏身19点、高坏6点、底2点、提瓶3点、壺2点、大型器台2点である。0134～0136・0156～0158・0169・0223・0234～0236・0258は坏蓋で、0137は外天井に径2.5cmを測るつまみを持ち、外天井はカキ目が施されており壺または高坏の蓋か。口径14.2cmを測る0136の外天井にもカキ目が施されており、つまみが欠失したものか。他は、外天井は回転ヘラ削り、その下から口縁・内面は回転ヨコナデで仕上げられている。0157は口径13.1cm、器高4cmを測る。口径は0258がもっとも小さく11.8cmで、0156が16cmでもっとも大きい。0158・0169・0258の外天井近くにヘラ記号がみられる。

0138～0142・0159～0163・0170・0171・0237・0238・0259～0261・0275・0276は坏身で、いずれも蓋受けの造りだしを持ち、外底は回転ヘラ削り、その上から内面にかけては回転ナデを施し、受け部からやや内傾ぎみに長く立ち上がり口唇となるものと、短く立ち上がる型がある。0142・0162の外底にヘラ記号があり、0260の内底には叩き痕がみられる。0140は口径12.4cm、受け部径14.6cm、器高4cm。0160は口径11cm、受け部径13.2cm、器高4.5cm。0161は口径13.5cm、受け部径15.8cm、器高3.5cm。0170は口径12.4cm、受け部径14.9cm、器高4.5cm。0171は口径12.7cm、受け部径14.7cm、器高4.1cm。0238は口径13cm、受け部径15.4cm、器高4.5cm。0275は口径10.6cm、受け部径12cm、器高3.3cm。0138・0141が大きく口径14.8cm・14.6cm、受け部径17.3cm・16.6cmを測り、0159・0163・0259・0261・0276が小さく口径10.4cm・11cm・9.5cm・10.8cm・10.8cm、受け部径12.6cm・13cm・10.9cm・13cm・12.2cmを測る。

0145～0148・0166・0277は高坏脚。0145・0146は脚部近くに一部カキ目が施され、他は回転ヨコナデで仕上げ、底径14.6cmを測る。0147には透かしがあり、0166は底径11.4cmを測る。0143は底径11径10.8cmを測り、0239は口縁下に櫛描波状文が施され、口径16cmを測る趣か。

0144・0167・0168は提瓶で、0167は外面にカキ目が施された太鼓状をなす胴からやや開きぎみに立ち上がり、外反し口縁となり、口径10.7～10.9cmを測る。0164・0165は大型器台の受け部で、0164は坏状をなし、口唇を肥厚させ、口縁下に浅い2条の沈線、その下に削り出し凸帯を巡らせている。受け部内面下は叩きによる青海波状文、外面口縁下は櫛描波状文、その下はカキ目、その下は格子目の叩き後、ヘラ状工具によりナデや削りが施されている。口径37cmを測る。0165も前者と同じ形状を持ち、施文も似ているが、口縁下はまず櫛描波状文を施し、カキ目を施し、さらに櫛描波状文を重ねている。口径33.4cmを測る。0149・0304は壺で、0149は肩が大きく膨った胴から屈曲して短く外反し口縁となり、口径16cmを測る。0304は胴から屈曲して開きながら立ち上がり口縁となり、口縁下に等間隔で削り出しの凸帯を巡らし、その間にカキ目状をなす条痕を施文し、ヘラによる等間隔の線刻を施し、口縁から内面にかけてはヨコナデ、屈曲部近くの内外面はヘラ状工具によるナデ、屈曲部下の内面は同心円叩きが施されている。口径50.4cm。

本調査出土の須恵器は7層群で出土したものがもっとも多く、6世紀末から7世紀前半のものが主体をなし、古いものとしては6世紀中頃のものがある。

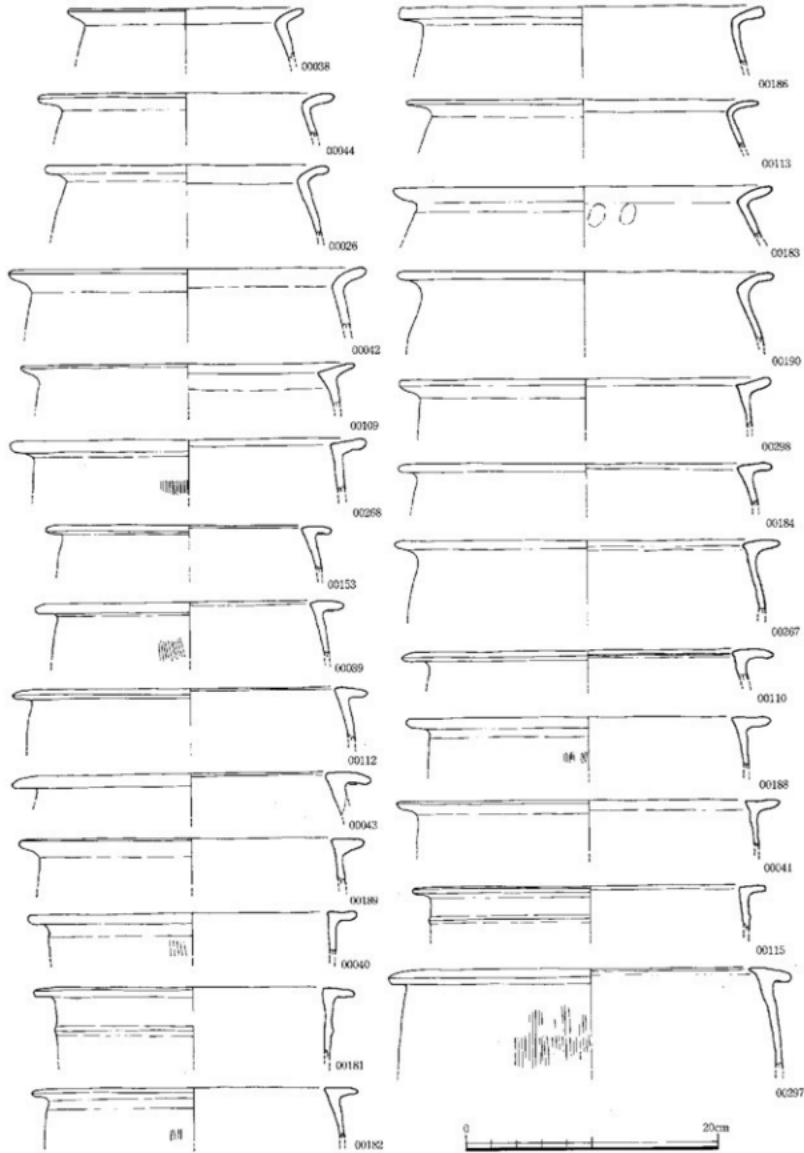


Fig. 13 包含層出土弥生土器実測図（1）

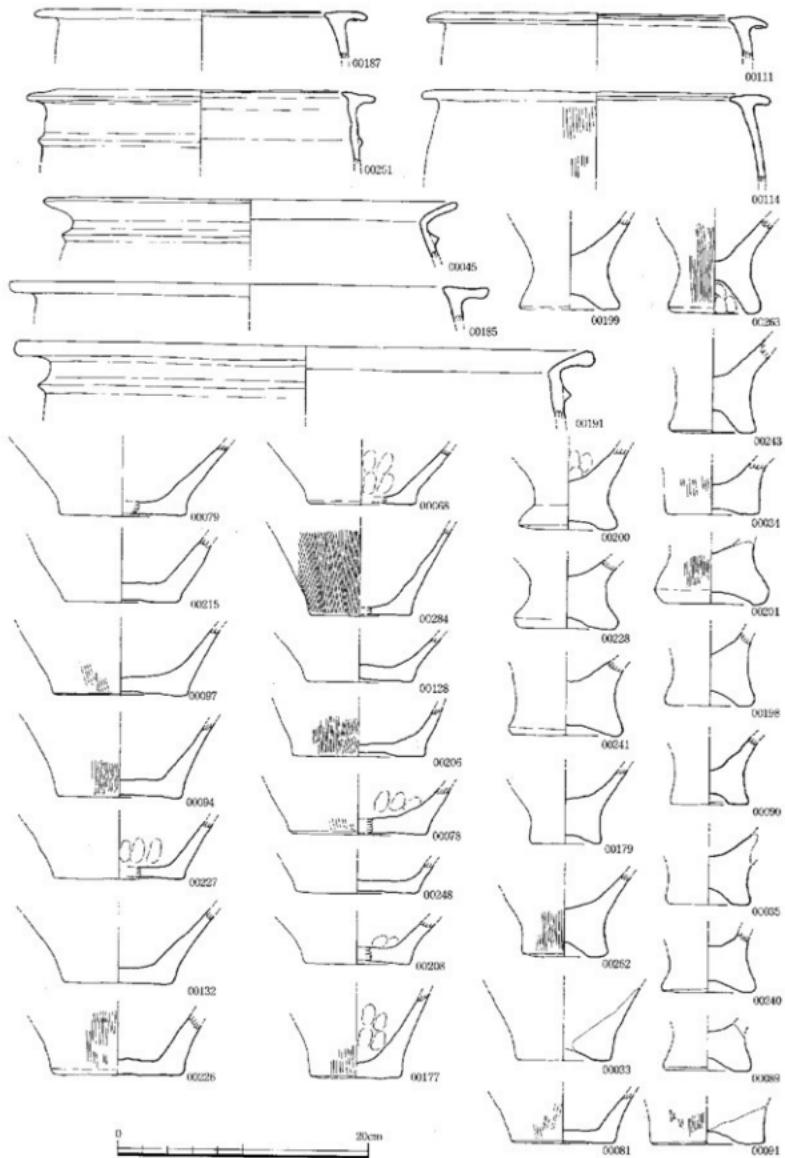


Fig. 14 包含層出土弥生上器実測図（2）

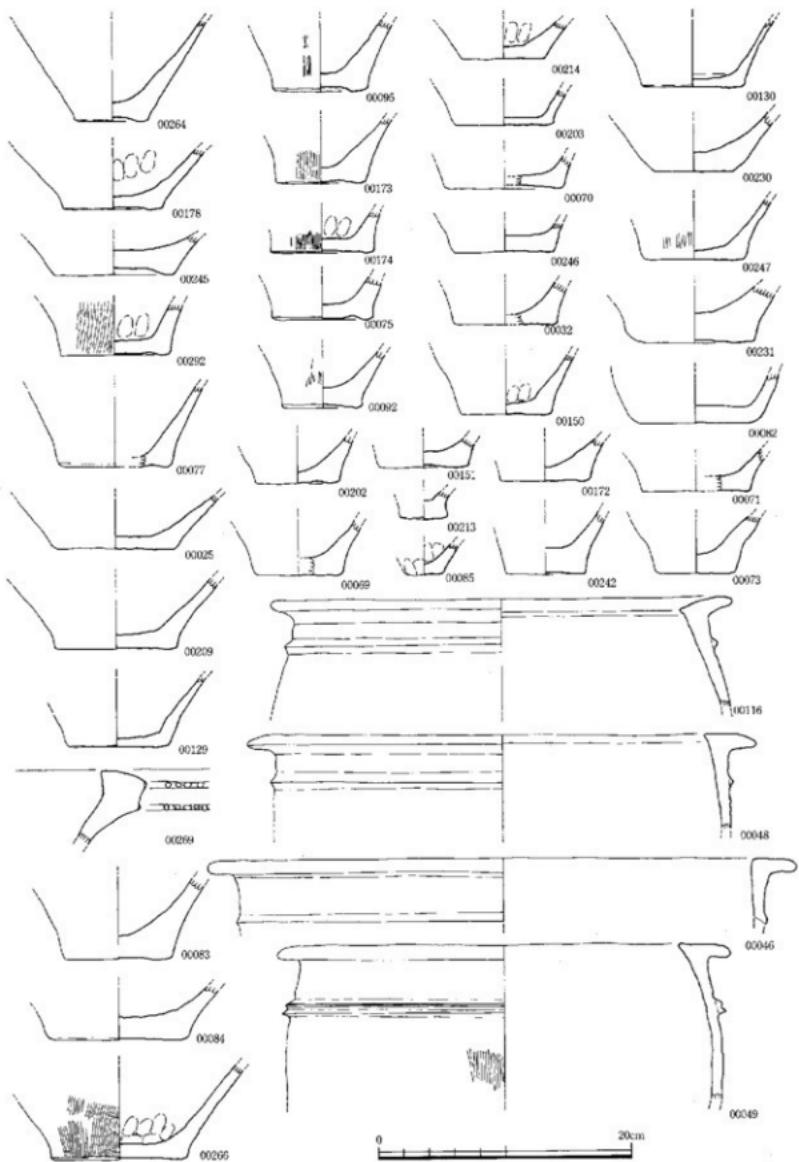


Fig. 15 包含層出土弥生土器実測図 (3)

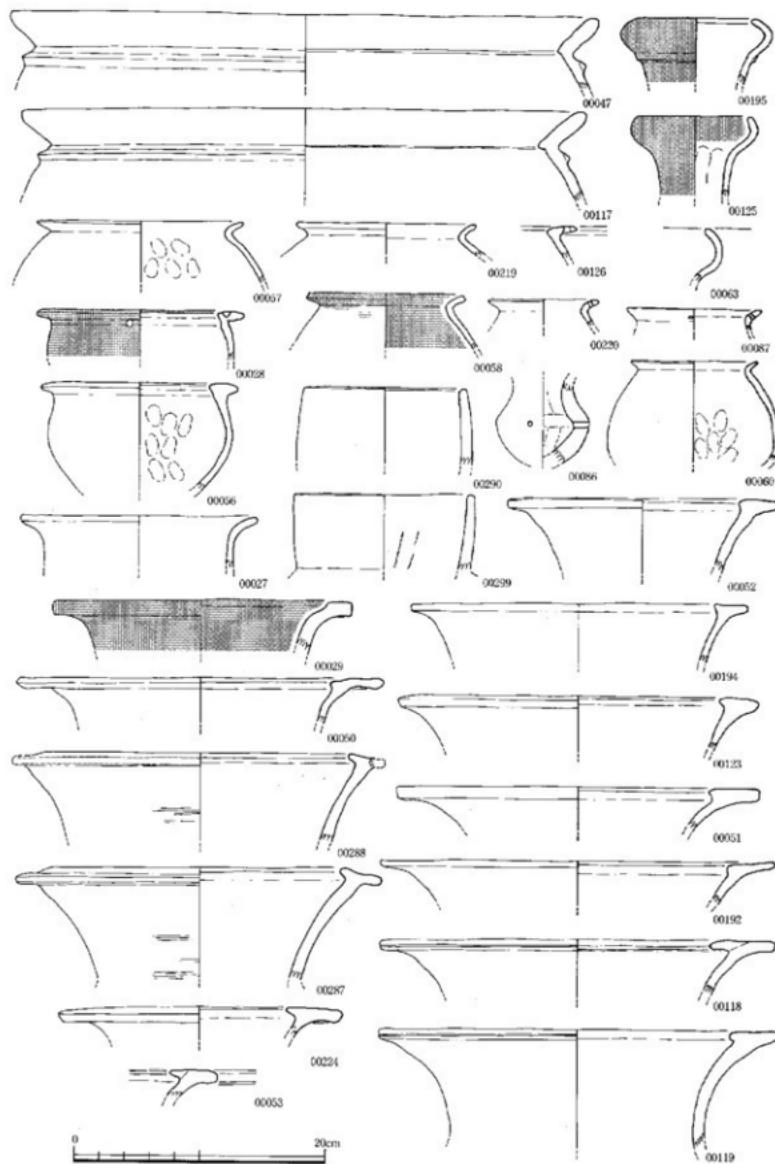


Fig. 16 包含层出土弥生土器实测图 (4)

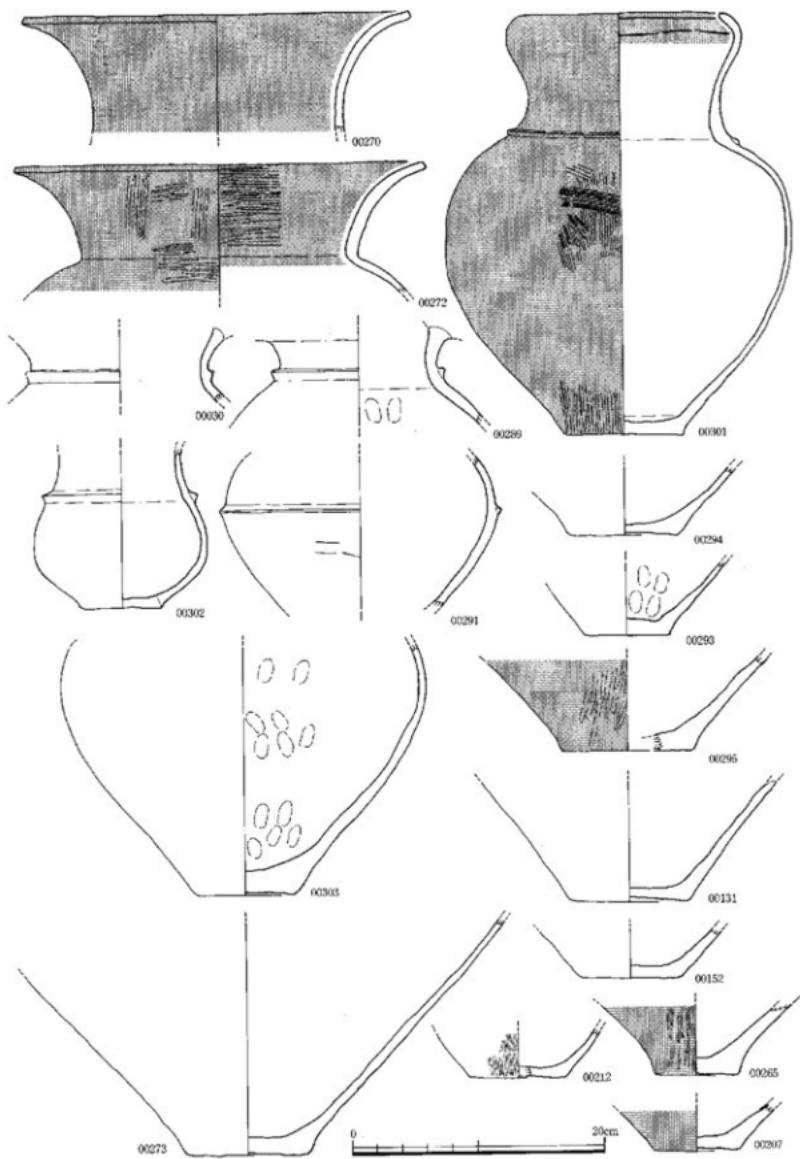


Fig.17 包含層出土弥生土器実測図（5）

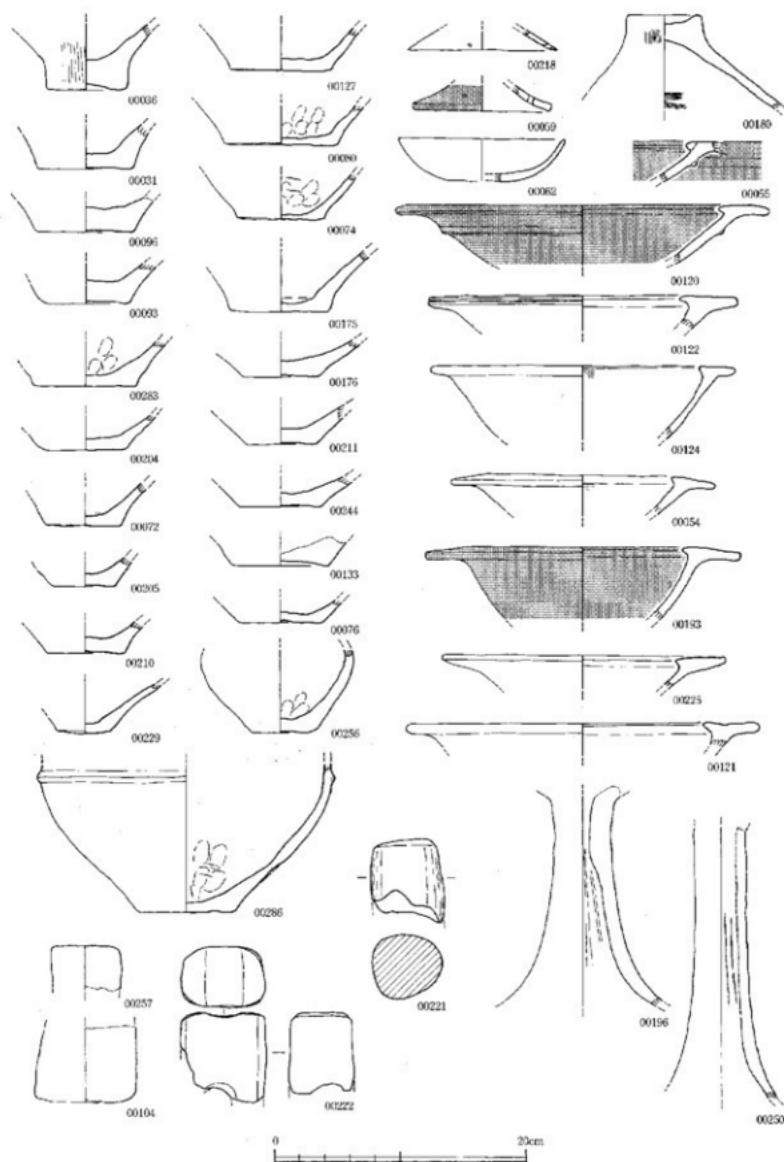


Fig.18 包含層出土弥生土器実測図 (6)

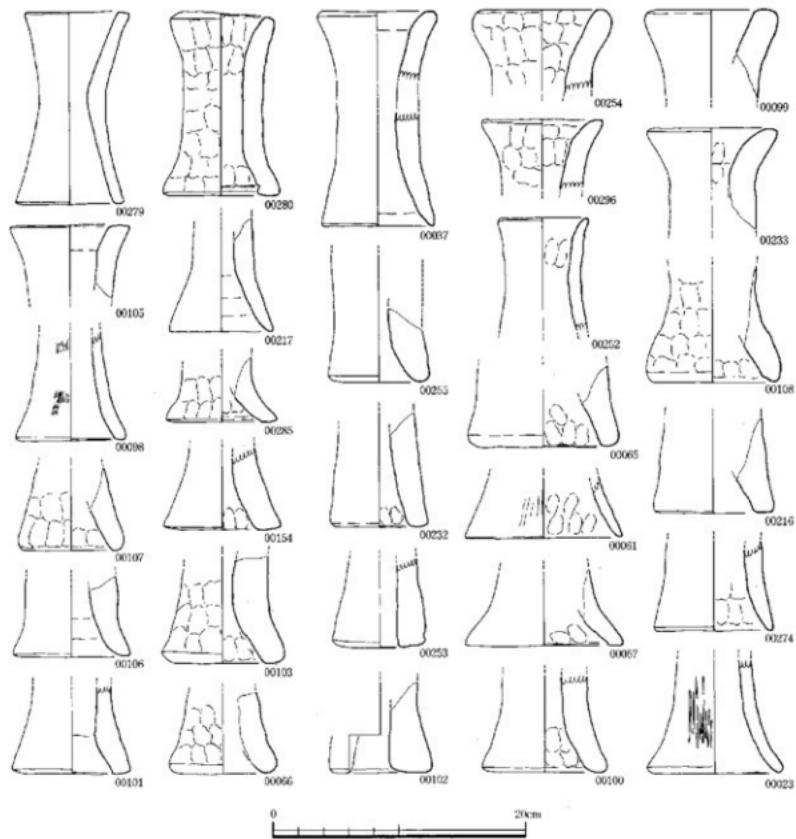


Fig.19 包含層出土弥生土器実測図（7）

(3) 出土弥生土器 (Fig.13~19, PL.8~12)

本調査では、整地層から17層までの堆積層からコンテナ25箱前後の甕・鉢・壺・蓋・高環・器台・支脚などの弥生土器が出土した。25・26・31~36・38~49・68~71・73・75・77・79・81~84・89~92・94・95・97・0109~0117・0128~0130・0132・0150・0151・0153・0172~0174・0177・0179・0181~0191・0198~0203・0206・0208・0209・0213~0215・0226~0228・0230・0231・0240~0243・0245~0248・0251・0262~0264・0266~0269・0284・0292・0297・0298は甕で、38・0113などは「く」字状口縁をなし、45は「く」字状口縁をなし口縁直下に1条の三角凸帯を巡らせている。0114は内傾する「T」字状口縁をなし、0111・0187は「T」字状口縁から逆「L」字状口縁の過渡期の口縁をなしている。逆「L」字状口縁をなすものがもっと多く、0109などは内傾し、40などは平坦な口縁となり、0110など

の口縁端部が垂れる型のものが逆「L」字状口縁を持つ甕のなかでは多い。46・47・0117・0191・0269は大型の甕棺用の甕で、47などは「く」字状口縁をなし、口縁直下に1条の三角凸帯を巡らせている。底部でみていくと、79などやや上底ぎみのもの、0263など上底となるものが多く、0132など平底となるものも一定量あり、75など上底でありながら底が丸みを持ち一部は着地するものの、0213など丸みを持つものは少ない。大型の甕は、口径46cm強を測り、他は、38の口径18.6cmがもっとも小さく、口径30cm前後を測るものが多い。

62は杯状をなす鉢で、器表面は剥離しているがナデか研磨が施され、丹塗りで口径13.2cm、器高3.3cmを測る。56も鉢か。59・0218は無頭壺の蓋で、0180は蓋、85は手捏ね土器か。54・55・0120～0122・0124・0193・0196・0225・0250は高環で、0196・0250は脚、他はいずれも鋤先状口縁をなし、口径25cm前後を測る。

壺は0272など片張りの脛から屈曲して外反しながら立ち上がり口縁となる広口壺、0301など袋

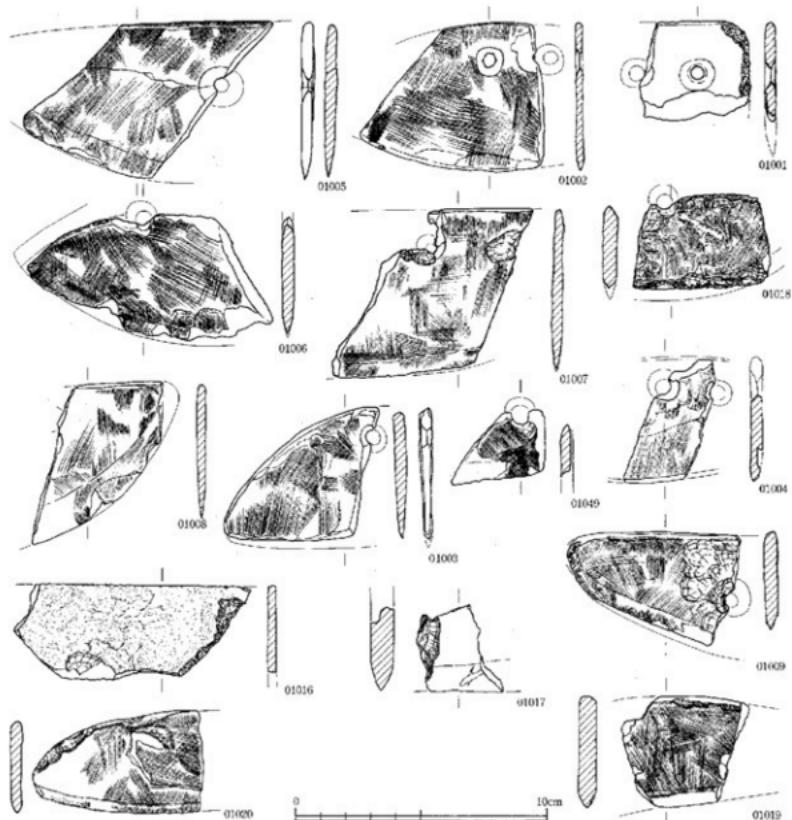


Fig.20 出土石器実測図 (1)

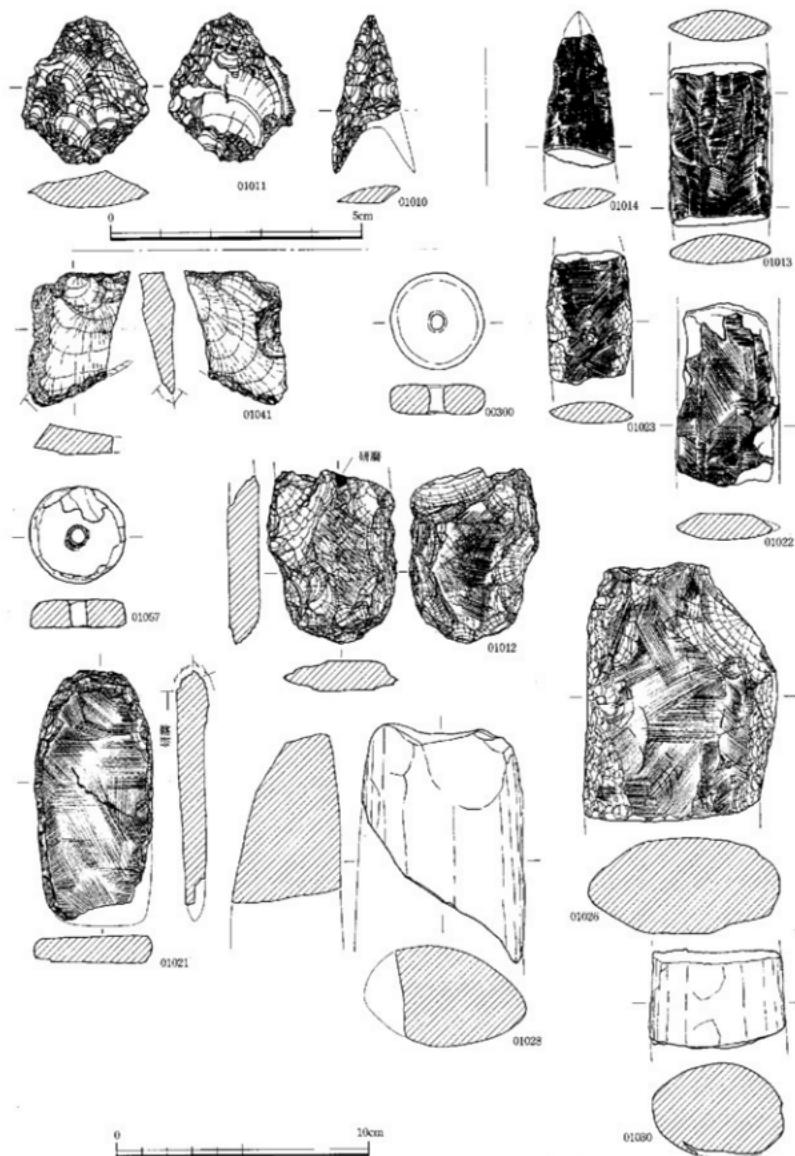


Fig.21 出上石器(2)および土製品実測図

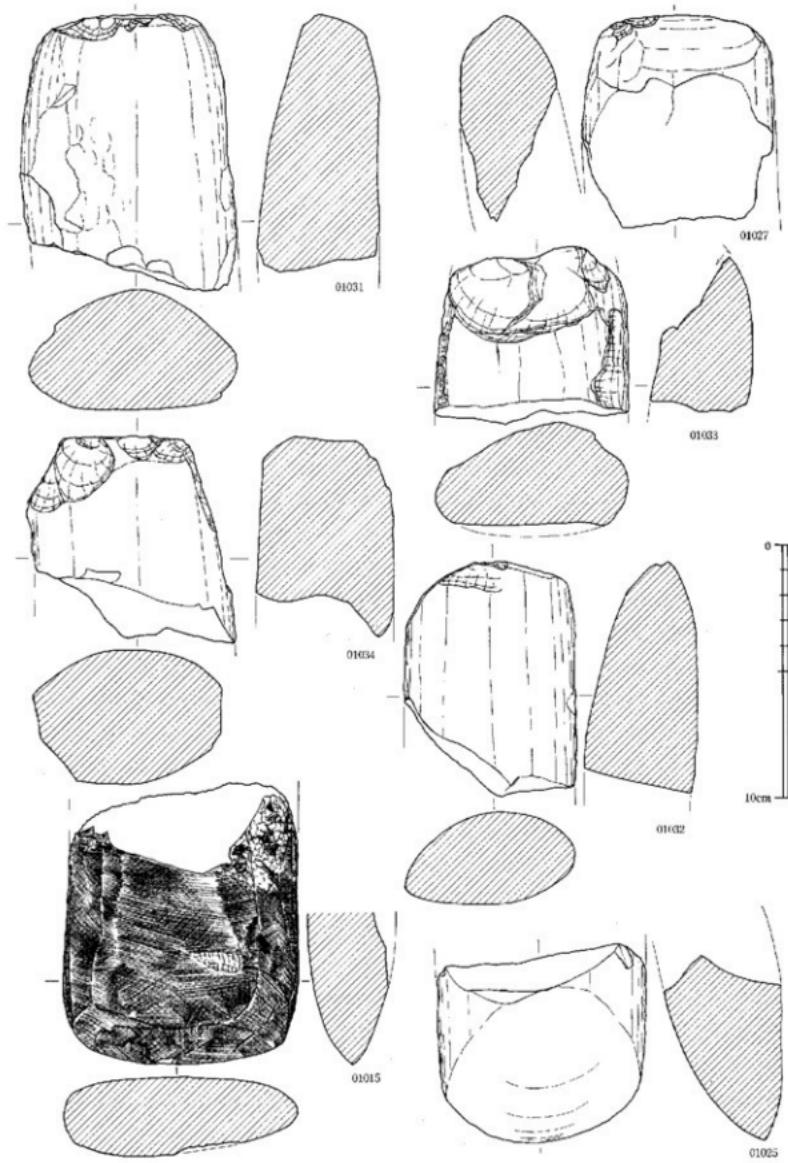


Fig.22 出土石器尖测图 (3)

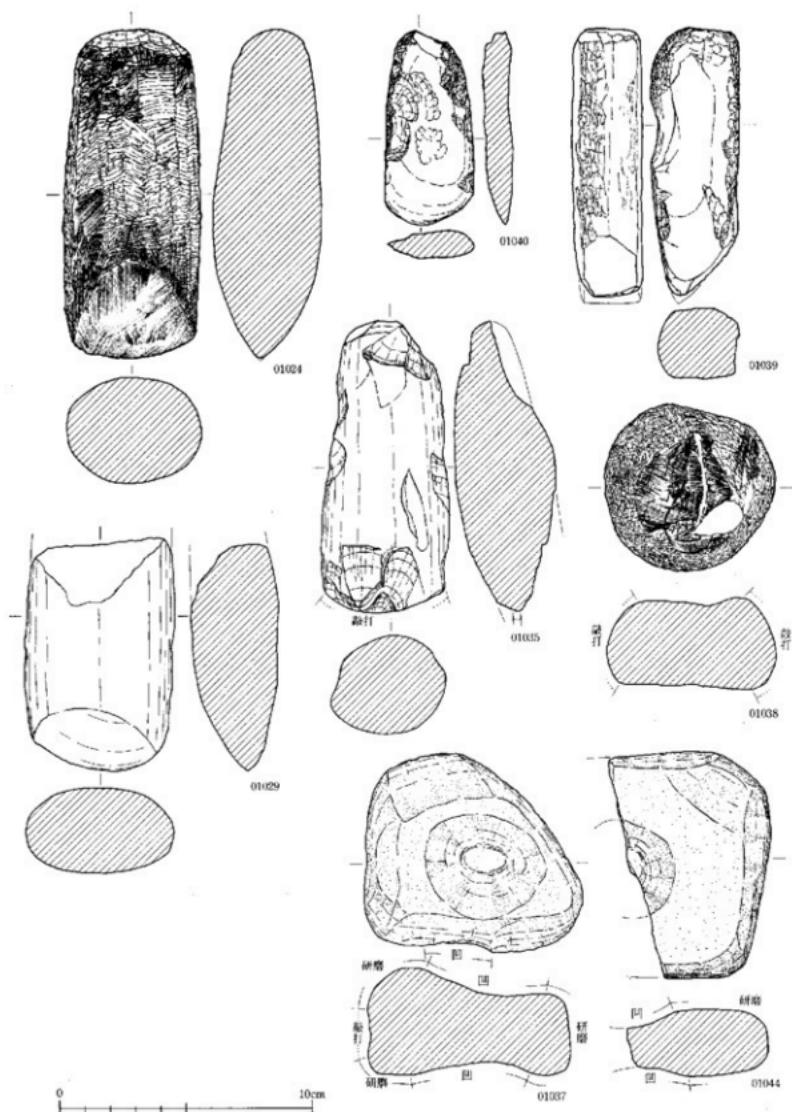


Fig.23 出土石器実測図 (4)

状口縁壺、58・0228などの無頭壺、29・50・53など鋸先状口縁を持つ広口壺、0299などの球状をなす胴から直に立ち上がり口縁となる直口壺、86などの小壺がある。底部でみると、やや上げ底、平底が多く、丸底ぎみのものを含む。0301は膨らむ胴から直に立ち上がり頭部となり、口縁は袋状をなし、頭部と胴の境に1条の三角凸帯を巡らし、底は平底である。胴中央と底近くの外面にハケ日調整痕が残り、胴外面から口縁にかけては円が塗られている。口径15.4cm、胴最大径27.5cm、器高33.6cm。無頭壺は口径10.5cm前後と15cm前後がある。鋸先状口縁をなす広口壺は口径22cm前後のものと30cm前後のものがある。

0104・0221・0222・0257は支脚、23・37・61・65~67・98~0103・0105~0108・0154・0216・0217・0232・0233・0252~0255・0274・0279・0280・0285・0296は置台である。

本調査出土の弥生土器は、第14層で出土した中期後半から後期初頭にかけてのものが多く、第13層までは後期後半までの土器が出土し、本調査でのもとと古いものは中期初頭のものである。

#### (4) 出土石器・石製品および土製品 (Fig.20~23, PL.13~15)

本調査では、縄文時代の石器7点、弥生時代の石器132点、土製品1点、弥生時代までの剥片などと石器素材119点、古墳時代の石器4点の石製品262点と土製品1点が出土した。

**縄文時代の石器** 本時代のものは、蛤刃磨製石斧1点(40)、蹠器1点、凹石3点(37・44・45)、石皿2点がある。40は蛇文片岩製で剥離加工により整形後、とくに刃部は丁寧な研磨を加え仕上げている。器長7.8cm・刃幅3.5cm・最大厚1.05cm・重さ48g強。これらの石器は縄文時代後期頃のものか。

**弥生時代の石器** 本時代のものは、石製穂摘み具などの農具・石剣などの武器・石斧類・敲打具などの工具・調理具などがある。農具は、石製穂摘み具27点(01~09・16・18・49)、磨製石鎌3点(17・19・20)があり、いずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを素材とし、粗割・敲打整形後、研磨を加え仕上げている。16は未製品、03は直刃の穂摘み具で、他は杏仁形か三日月形を呈する。

武器・狩猟具は、磨製石剣5点(13・14・22・23)、打製石鎌(10)がある。前者は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを素材とし、粗割・敲打整形後、研磨を加えている。10は良質の黒曜石製で、表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工を加え仕上げている。

石斧類は、打製石斧2点(12・21)、伐採斧である太型蛤刃石斧36点(15・24~35)、加工石斧の方柱状抉入片刃石斧1点(39)、扁平片刃石斧2点、方柱状片刃石斧1点がある。12・21は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスの扁平な礫を素材とし、縁辺に表裏から二次加工を加え、節理面にかかるく研磨を加えて仕上げている。器幅は5.1cm・5.6cm・最大厚1.2cm・1.3cm。24は安山岩を素材とし、粗割・敲打により横断面形が円形に限りなく近い梢円形に整形後、刃部に丁寧な研磨を加え仕上げている。器長13.1cm・最大幅5.5cm・最大厚4.3cm・刃幅4.9cm・頭部幅4.4cm。他の太型蛤刃石斧は今山産出玄武岩を素材とし、粗割・敲打整形後、研磨を加えて仕上げている。横断面形は梢円形をなすものが多く、15はより扁平な梢円形に、30・35は円形に近い形をなしている。刃幅は15が8.3cm、29が5.1cmを測り、頭部幅は27が6.3cm、28が5.3cm、34が4.75cmを測る。39は凝灰岩ホルンフェルスを素材とし、剥離・敲打整形後、研磨を加え横断面形が方形に近い形に仕上げている。器長10.65cm・最大幅2.8cm・刃幅2.25cm・頭部幅2.6cm・最大厚3.45cm・抉入部最小厚3.2cm。

工具は、敲打具3点(35・38)、石杵1点(61)、砥石18点(52・61)、紡錘車1点(0300)がある。38は暗緑色を呈する太型蛤刃石斧敲打用の敲打工具で、木製の柄に着装したと考えられ、表裏中

央に摩擦痕があり、器径6.7×6.8cm・最大厚3.8cm、重さ268.09gを測る。35は今山産出玄武岩製大型蛤刃石斧の転用品で器長11.65cm・最大幅5.05cm・最大厚3.95cm。0300は上製で、手握ね整形し、焼成も良い。最大径3.8cm・最大厚1.2cm。利器・調理具は、削器2点（11・41）、敲石10点（47）、磨石18点がある。11は不純物を多く含む黒曜石の不正形剥片を素材とし、素材の基部および縁辺に粗い二次加工を加えている。器長2.95cm・最大幅2.5cm・最大厚0.7cm。41は古銅輝石安山岩製の剥片を素材とし、素材の先端に表裏から二次加工を加え鋭い刃を作り出している。器長5.9cm・最大厚1.6cm。以上のほか、漁撈具の浮子1点がある。

以上の石器および土製品は、弥生時代中期初頭前後から後期後半のもので、中期初頭前後のものが多く、後期に入るものは砥石などがある程度で少ない。

**古墳時代の石器** 本時代のものといえるのは、第1～13層のもので紡錘車1点（57）、石製編錘1点（46）、砥石2点がある。砥石は弥生時代のものに混じっていると考えられるが、ここでは明らかに古墳時代と考えられるもののみをカウントした。57は滑石片岩製で、削り・剥離加工によって円柱台に整形し、研磨を加えて仕上げている。径3.8～3.9cm・最大厚1.1cm・重さ28.6g。

## 第4章　まとめ

片江B遺跡群は、樋井川中流域の樋井川支流本松川と本松川支流の片江川間に油山から北東方向に派生した先端の標高12～28m強を測る丘陵上に所在しており、本調査地は片江B遺跡群のほぼ中央部にあたる。

本調査の成果をまとめると、以下の三点をあげることができる。一は、2～7層の上面で、14世紀前後の井戸1基・地下式横穴1基・上坑4基と8世紀前後の建物2棟を検出したことである。地下式横穴から供獻と考えられる土師器杯が出土したことは、九州の同遺構が検出されている各遺跡で五輪塔や板碑の出土例があることなどから同遺構が墓である可能性がより高くなったといえよう。また、同遺構は福岡市内の諸岡遺跡・板付遺跡などの調査例から複数で所在することが多く、本調査地の北側斜面に数基所在すると考えられる。また、8世紀前後の建物は、谷頭に近い場所に立地しており、当時の農村集落の建物配設を考えるうえで参考となろう。

二は、古墳時代と弥生時代の包含層を検出したことである。7層群が古墳時代の7世紀前後に、14層群が弥生時代の中后期後半から同時代後期初頭頃に、それぞれ多量の遺物を包含する上層が形成されており、本調査地の南側・北側および西側の丘陵に当該時期の集落の存在が推定できる。

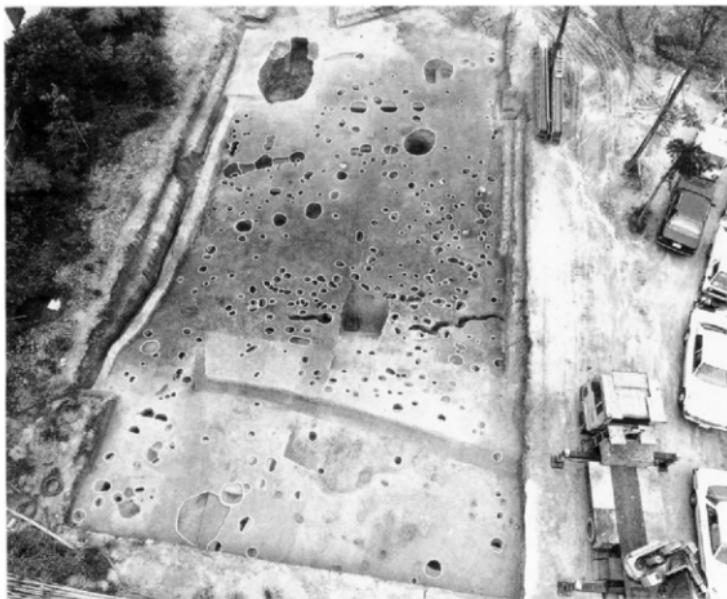
三は、本調査において、床面で多数の杭穴を検出したことである。時期は確定できないが、弥生時代から古墳時代のものと考えられる。本調査地が谷頭に当たること、本調査区の東側隣接地には井戸が設けられており、湧水がなくなったことはないことであり、弥生時代から古墳時代にかけても湧水があったと考えられ、本調査検出の杭穴は、湧水を利用する水場の施設を想定できる。

# 図 版

PL. 1



(1) 調査予定地（北より）



(2) 調査区遺構分布状況（南東より）

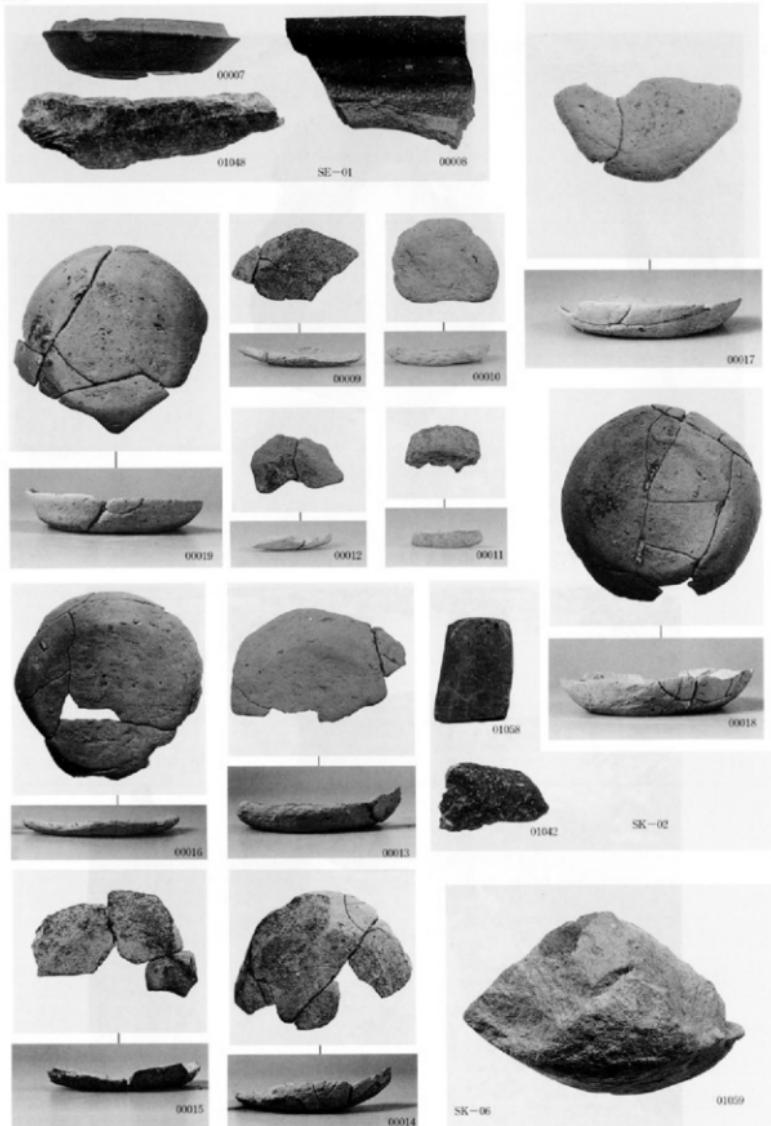


(1) 第2号地下式横穴完掘状況 (南東より)



(2) 第2号地下式横穴堅坑 (南東より)

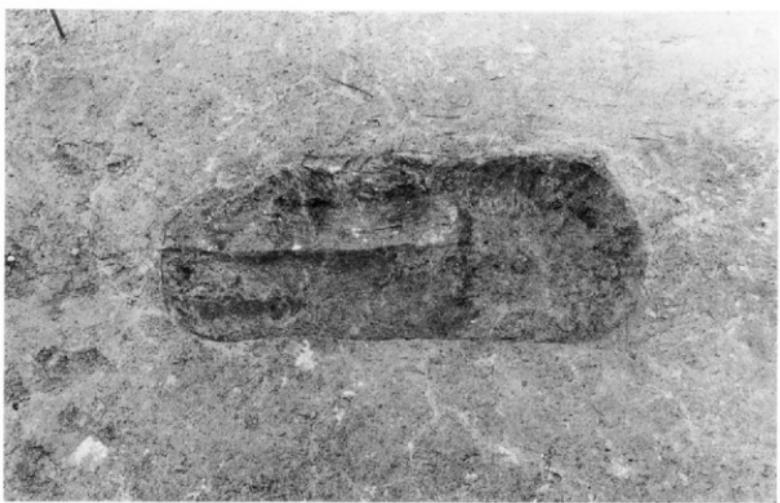
PL. 3



各構出土遺物

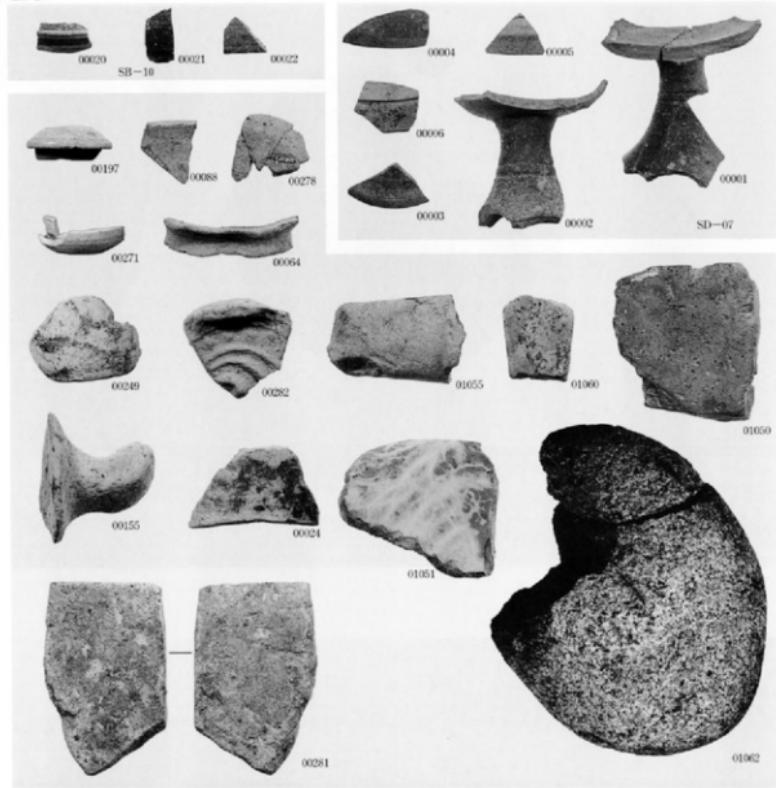


(1) 第1号井戸完掘状況

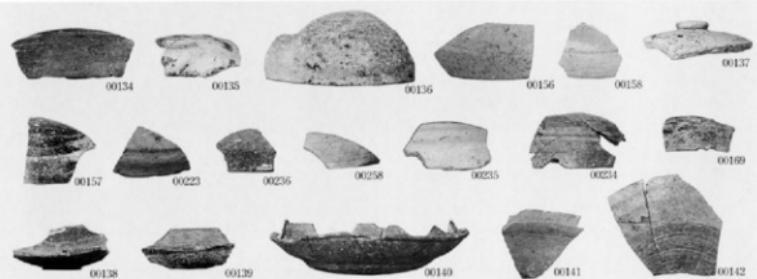


(2) 第4号土坑完掘状況

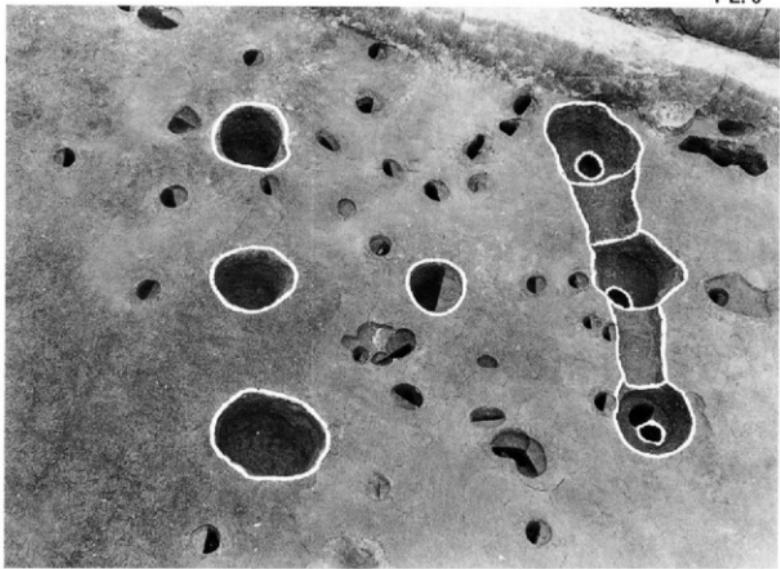
PL. 5



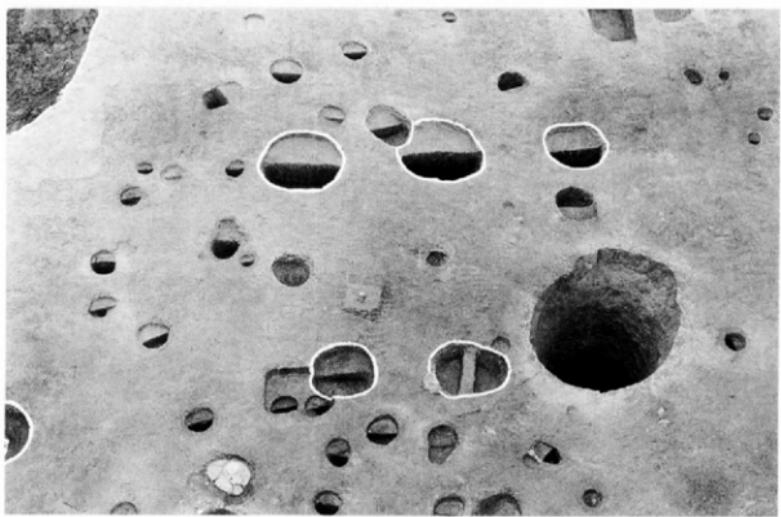
(1) 各遺構出土遺物および遺構検出時出土遺物



(2) 出土須恵器 (1)

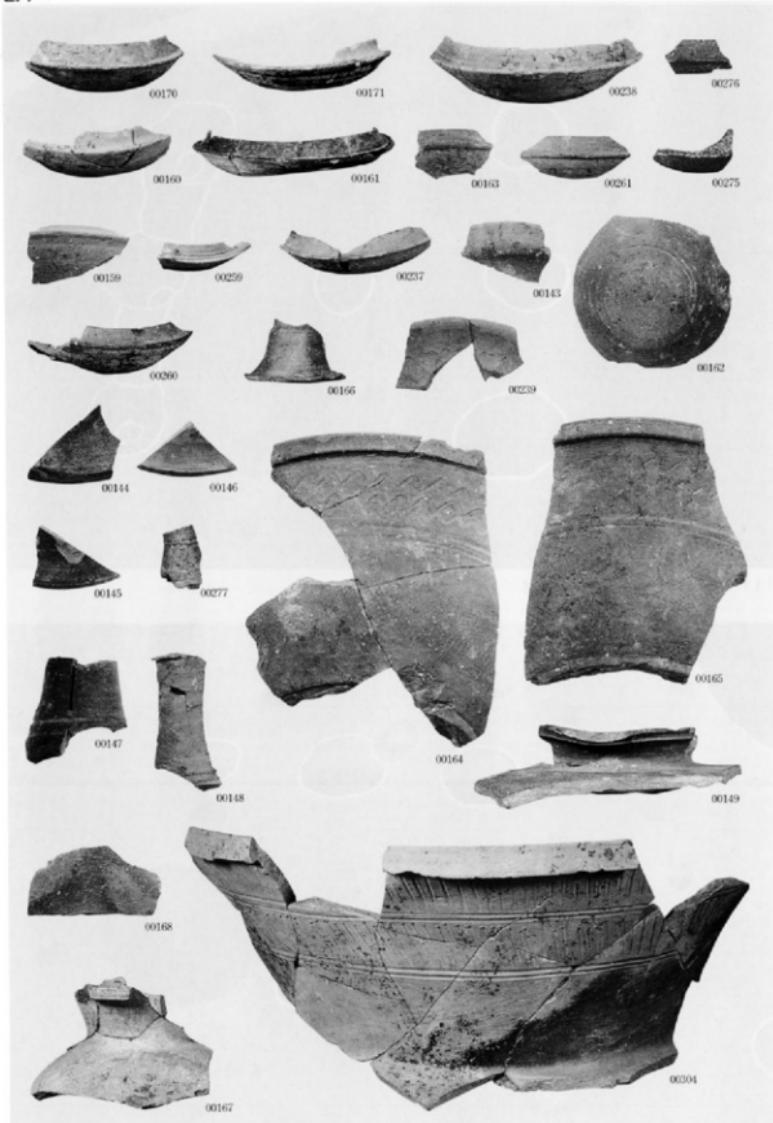


(1) 第10号掘立柱建物完掘状况

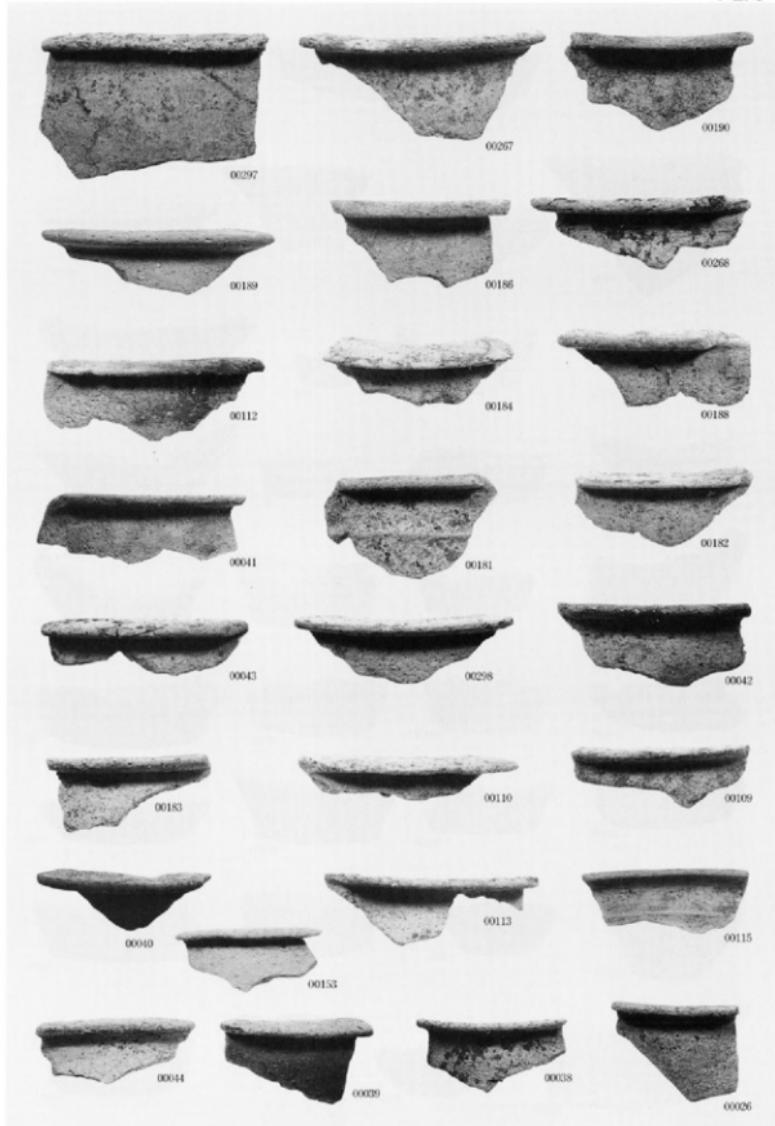


(2) 第11号掘立柱建物検出状況

PL. 7

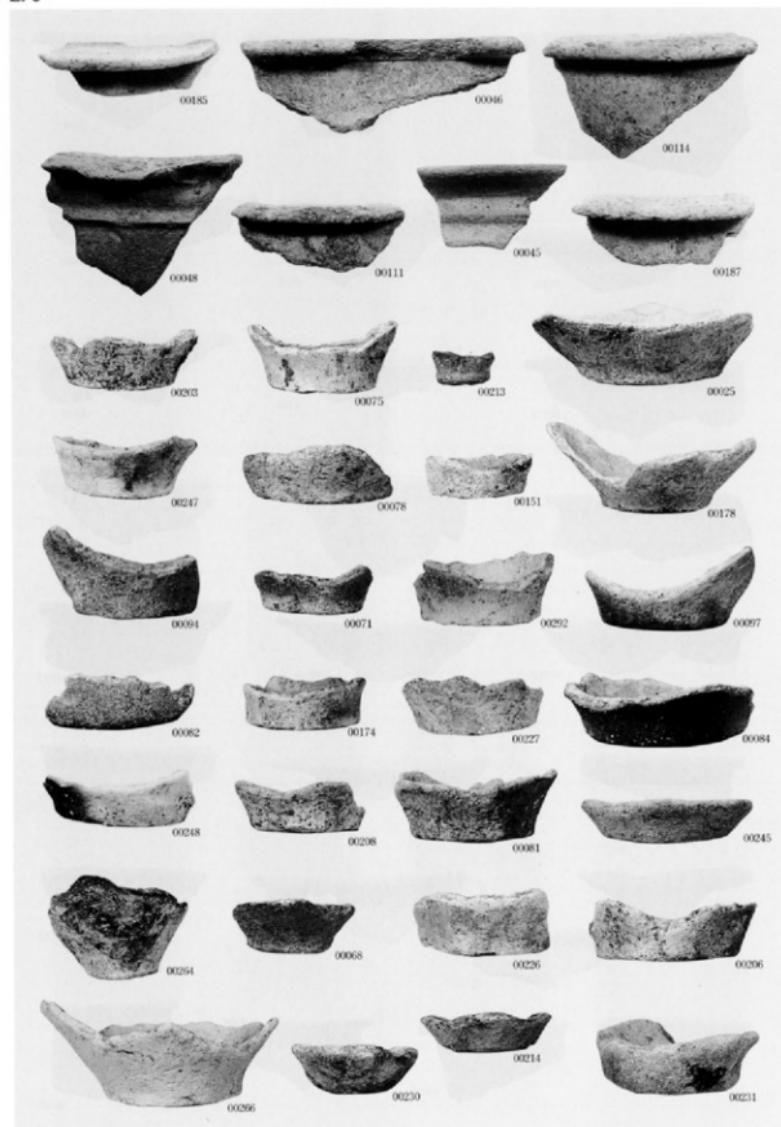


出土須恵器（2）



出土弥生土器（1）

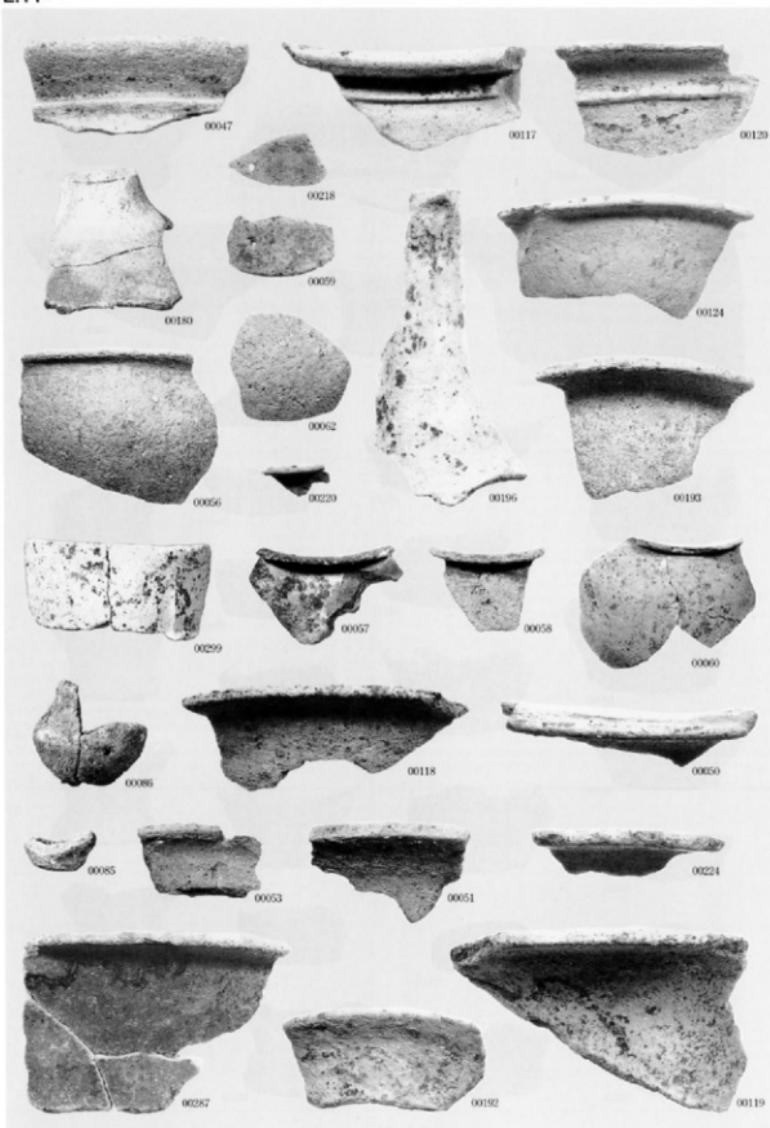
PL. 9



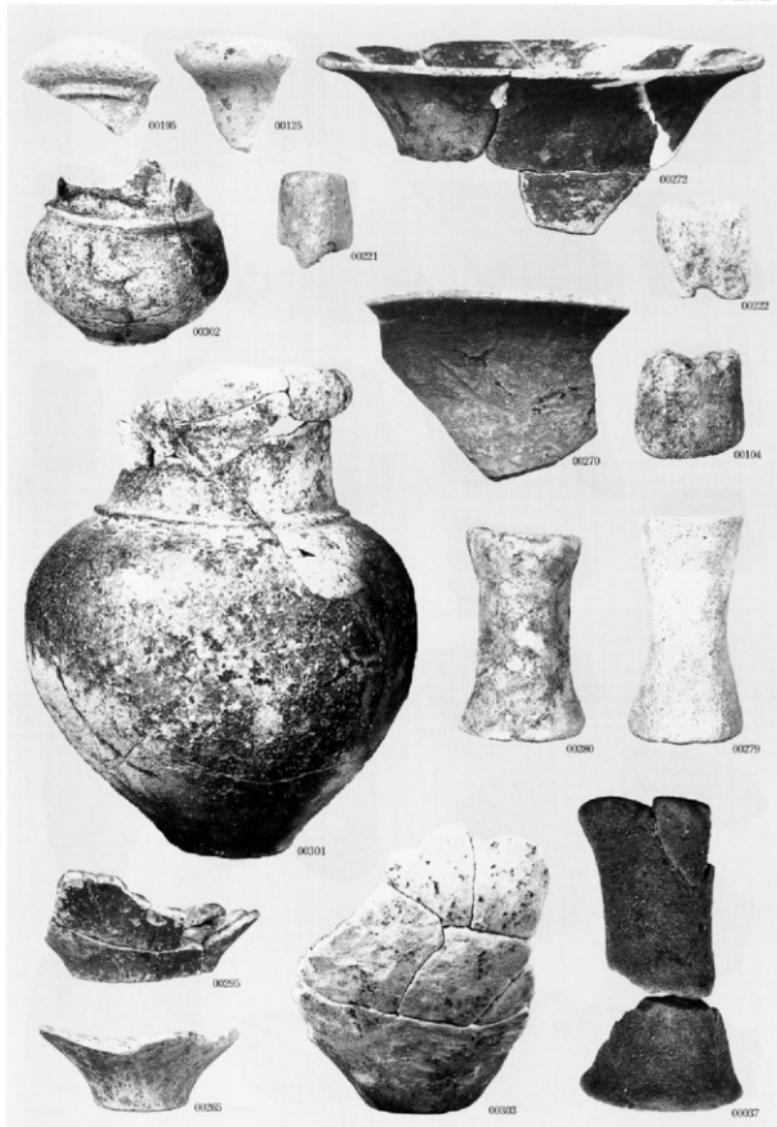
出土弥生土器（2）



出土弥生土器 (3)

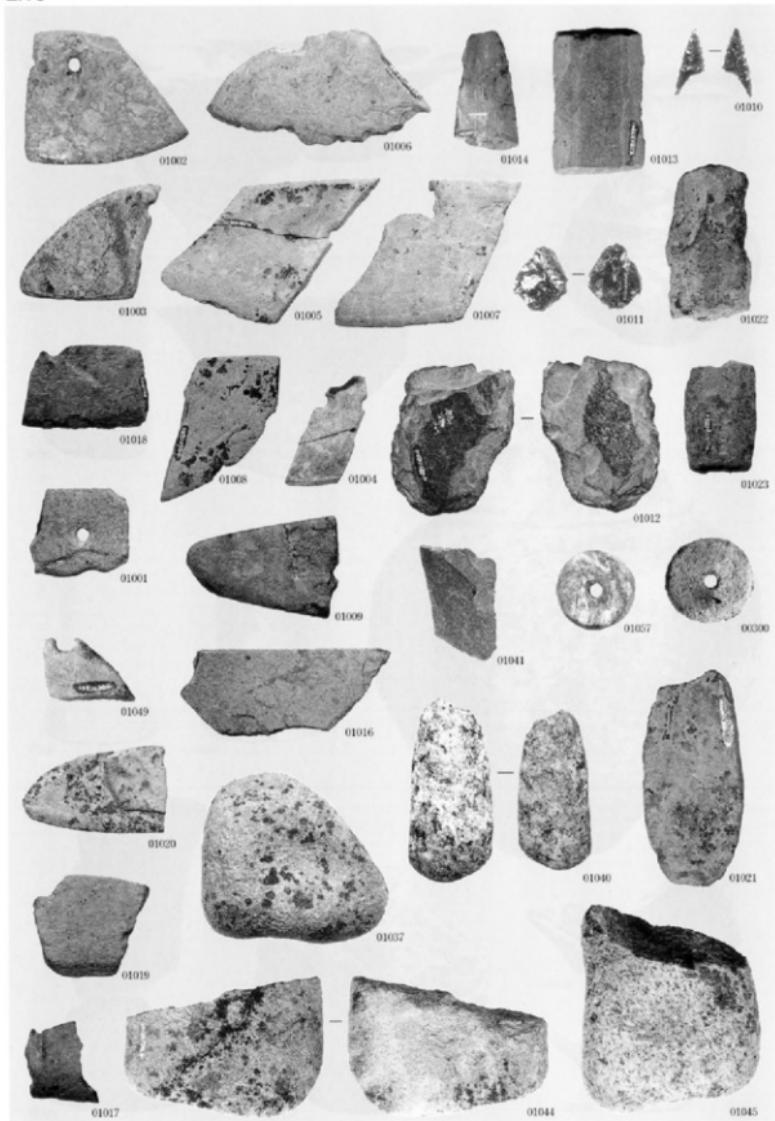


出土弥生土器 (4)

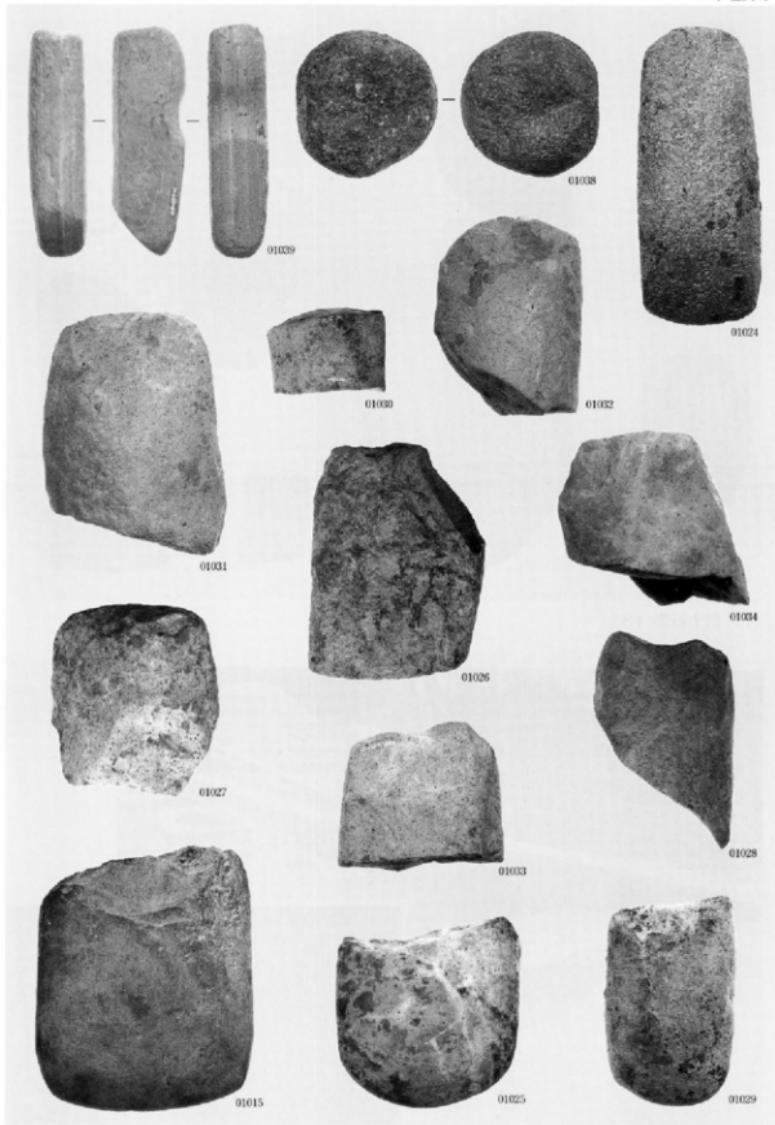


出土弥生土器（5）

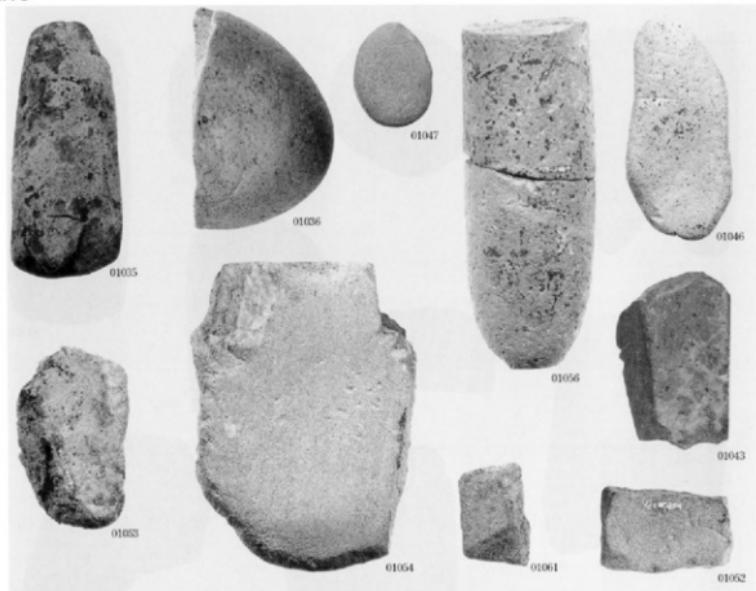
PL.13



出土石器（1）および土質<sup>11</sup>



出土石器（2）



(1) 出土石器 (3)



(2) 調査区土層堆積狀況



(3) 弥生土器出土狀況

# 片江B遺跡

—片江B遺跡群第2次調査報告書—

2001年(平成13年) 3月30日発行

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 三栄印刷株式会社  
福岡市博多区千代一丁目6番1号

